
我ガ働哭ハ、拳ト成リテ

南部 樋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が慟哭八、拳ト成リテ

【Nコード】

N7490Y

【作者名】

南部 樋

【あらすじ】

神官殺しで奴隷闘士となったヴァルトは、この日ついに自由を勝ち取る事ができた。

奴隷闘士となってから五年……久し振りの自由の身となった時、ヴァルトは闘技場では敵無しの【拳帝】と呼ばれるようにすらなっていた。

しかし、遠い昔に失ってしまった家族への憧れや、憤りは衰えるどころか、神への憎悪へと変貌していた。

【拳帝】 【不死者】 e t cと数々の異名を持つ。男が織り成す人

間模様を描く話。

ヴァルトは自由の中で“何を目指し” “何を成すのか” 握った拳
では何も掴めない事が解らぬまま……

自由を掴む拳

石畳を乱暴に擦る男の硬い足音だけが、陽の当たらぬ通路内で反響する。

外界へと続く薄暗い通路の終点は明るい。歩を進めるにつれ、徐々に視界が光で白く染められてゆくのが分かった。そのまま、光が満ちる方向へと真っ直ぐに向かう。

男の足取りは薄闇に名残を残すかのように、ゆっくりとしたものだった。反面、薄闇に決別を告げるハッキリとした男の意志が、力強く踏みしめる一步一步から見て取れた。

そして……遂に、太陽の陽射しが指す世界へと男の大きな足が一步踏み出された。

舗装された石畳の質が変わり、足裏から伝わる感触にも若干の違和感を覚える。それは長い年月に渡って男が追い求めていた、懐かしい感触だった。

男の顔に浮かんでいた、薄暗い闇を惜しむような表情は既に消えている。実際は、徐々に視界を覆う陽の光に眼が慣れず、細めていただけに過ぎなかったのだが……男は自分でも知らないうちに、感慨に浸っていたのかもしれない。

突然、風が吹いて男の顔を優しく撫でる。

風を感じる機会は当然ながらこれまで何度もあった。だが最後に“外”で感じたのは、何年前だったろうか。

数年振りに“外”で浴びた太陽の光——否、自由の光を全身で謳歌するように……男は悠々とした動作で大きく伸びをした。

「よう！ 拳帝様、アンタがここから出て行っちゃうと、俺の懷が寂しくなるなあ」

唐突に背後から声が掛かる。男は声のする方向へ視線を向ける事無く、耳を僅かに動かすだけだった。

“外”の感触を肌で感じ取る男の様子を見て、暫くは口を出さなかったのだらう。

男が出てきた通路の入り口を固めるように、二人の兵士が立っていた。話し掛けたのはその片方で、男の大きな背中に向け、おどけた口調で言葉を続けた。

「あんたのお陰で、こっちは随分と儲けさせてもらったからな。正直、また別の力強い奴を見つけて賭ける位なら、賭場に行っても博打でも打った方がマシってもんだ」

「はっ！ そんな事をすりゃ……暖かい懷も冬を待たずして、チエドラ山の山頂並みに寒くなるさ。あんた、博打が恐ろしく下手そうな顔だからな？」

「言ってる！ なあ、ここだけの話……いつでも帰ってこいよ？ 勿論、また奴隷としてだけどな！」

いくら話しかけられようが、男は決して振り返えない。

前だけを向いたまま、意地の悪い笑みを浮かべると兵士に言葉を返した。

「そんな時は、あんたの懷に氷をぶち込むためだけに雑魚に殺されてやるよ」

男が発した言葉が余程気に入ったのか……、二人分の盛大な笑い声は、男が今しがた出た通路にまで響き渡った。

「じゃあな！ 拳帝。アンタに“神の祝福があらん事を”ってな」
「ははっ！ 神か……神なんて……」

突如、轟音が鳴り響く。

男が続けざまに言い放った言葉は遮られ、兵士の耳元に届くことは無かった。

轟音の正体は、男が通路から出たのを見計らって降ろされた鉄格子の音だ。見るだけで相手を威圧するような重い鉄格子が派手な音を立てて、入り口を閉ざす。

それは、まるで——長年閉ざされた空間で、生き延びてきた男の頑なに閉ざされた心を代弁するかのようでもあった。

「おい、最後なんて言ったんだ？」

兵士は閉まる鉄格子に邪魔をされて、聞こえなかった続きを男に促す。だが男の口は、二度と同じ言葉を告げはしない。

ただ静かに、そして豪快に……

己の生と自由を勝ち取った、唯一無二の証である掌を振って答えるのみだった。

(1-1) 歓声を招く拳

速めるわけでも、遅らせるわけでも無く――。

男は大通りに入った後も、闘技場を出た時と同じ速度を保ったまま堂々たる足取りで闊歩していた。

きよろきよろと見回すような無粋な真似をしなくとも、様々な情景は目に入る。

王都・アリユテーマの中心に位置する闘技場は、古来からの建築様式で用いられていた石造りだった。だが、一步踏み出すと周囲は煉瓦造りの建物が連なっている。

舗装がなされ、馬車や荷車が行き来し易いように石畳の凹凸も少ない。これが一筋裏道へと入れば状況も違うのだろうが、良い道にはより多くの人々が集まる。男が足を踏み入れたばかりの大通りも例外では無く、道端に所狭しと露店が並び活気が満ち溢れていた。

闘技場から開放されたばかりの男は知る由も無かったが、今日は月に一度の市が立つ日であったことも原因だった。

近隣の村からもこの日ばかりは街へと赴き、商人を介さず売買を行う事が許されている特別な日である。従ってその賑やかさは、普段以上のものであった。

必死に値引き交渉をしていた者。

いい品を求め露店をうろつく者。

客の懷から出来る限りの金を搾り出そうとする商人。

隙だらけの田舎者から財布を掏ろうとしていたスリ。

酔って機嫌良く歌う酔っ払い。

それぞれが市の喧騒に取り込まれ、各々の成す役割をこなす者達ばかりであったが——大通りに突如現れた大柄な男が目に入ると、彼らは無意識のうちに言葉を嚥む。そして、自然と視線で男の姿を追ってしまっていた。

伸ばし放題の赤毛に、これもまた伸びきった髭を蓄えた巨体はかなり目立つ風体だとは男自身も思うが、彼らの関心は風体では無く別のものにあつたらしい。

最初は一人、次に二人、さらには三人……

様々な声に混じり、ぼつりぼつりと数人が男に関する言葉を口にする。

「おい、あれ……拳帝だよな？」

「拳帝が何故ここに……」

「……まさか、今日抜け出たのか？」

「陛下から恩赦を頂いたというのは、本当だったのか？」

「くっそ、アイツの所為で幾ら損をしたと……」

「あいつを殺せば、俺の名前も……」

様々な声が賑やかに飛び交う大通りを進むにつれ、男の顔がみるみるうちに不機嫌な表情へと歪められる。ついには道の往来で、歩みを止め苛立ちを露にした。

雑踏の中、自分へと向けられる視線と言葉を捕らえ、男は顔を顰めて人混みを見つめる。

最初のうちは、男も気には留めなかった。だが……こつも多く、視線と言葉を向けられれば、それだけ不快感が顕著に現れる。

——チッ、うざってえ……

心の中で悪態を吐き、男が威圧を込めた眼で人々を一瞥する。

元々男の顔は人受けが良い方では無い。眼付きは悪く体格も人一倍大きい為、黙っていたら機嫌悪く、怒っている様な印象を昔から受ける様な容姿だった。

一度は皆閉口し、それぞれの行うべき行動へと戻る。だが、結局はそれすらも短い間でしかなかった。皆が皆、威圧感にたじろきながらも男に視線を注ぎ続ける。

人々の視線に込められたものは多種多様であった。

興味、畏怖、憧憬、嫉妬。

様々な感情が入り混じっていたが、それぞれが抱いている根源は同じである。

至って単純で、人が人であるが故の感情。――闘技場にて豪腕を振るい、今まで最強を誇っていた男“拳帝”に対する好奇の眼差しであった。

男が立ち止まった為、それまで興味を引かなかった者ですらも男へと視線を向ける。結果、老若男女問わず、無数の視線を浴びる羽目になった。市の勢いも相まって男を中心に氣勢溢る、いかんともしがたい空気が漂う。

――結局、何処に行っても……貴様等が俺を見る目は同じかよ。

熱気の籠もった視線を浴びるにつれ、無意識のうちに現実と過去との去来を繰り返す。

感情を激しく揺さ振られ、男はつい先程まで自分が居た場所――闘技場に立っているかの様な錯覚に襲われた。

命を賭けたやり取りを毎日繰り返すだけの虚しい場所は、五年も過ぎたにも関わらず愛着など抱ける筈も無かった。

既に自由を勝ち取った身としても、好き好んで回想に浸る様な場所では無い。

湧き上がる記憶を持っている自分自身ですら、忌々しく感じてしまつ。あれは愚劣の居城たる場所であり、命を科して過ごした不快な日々だった。

闘技場で男が出場する度、誰もが“その時”を待っていた。

掛け金などは足を向ける些細な要因にしか過ぎない。例えば男に賭けていようと、人々が最後に辿り着く想いは一貫したものだつた。理不尽な暴力と殺戮を道楽として求める者達の願いは、ただ一つ。

最強と謳われた【拳帝】が敗北する、劇的な瞬間。

それは――男が世に与えられた、生を喪失する瞬間の他無かつた。

“その時”を待ち望み、人々は血走つた目を輝かせる。中央に位置する闘技空間を囲む形で設けられた観客席は、溢れんばかりの熱気で毎日が噓せ返っていた。

訪れる者達にとつては日々の労働に明け暮れ、死んだも同然の目を唯一輝かせる場が闘技場のみのだろう。

人々は口から汚い言葉を吐きかけ、各々の想いを思うがままに飛ばす。

掛札を握り締め、一発逆転を狙う者などは……中でもとびきり手に負えなかつた。

賭けるのは個人の意思にも関わらず、予想が外れば理不尽な言葉を喚き散らす。拳句、男が生き残つた事に恨みを乗せ、言葉と共に食い掛けの食べ物を投げつけてきた事も毎日のようにあつた。

決まってそういう輩を黙らせるのは、衛兵でも周囲の人間でも無

い。唯一、彼等が黙り込むものと言えば――侮蔑の思いを込めて睨んだ、男の視線だけだった。

救いの手を差し伸べる相手もいなければ、心の底から自分を認め
てくれる相手も居ない。

檻に囚われる事も無く、他人に枷を嵌められて足掻く事も無く。
男にとってあの場に居た人間の全てが、反吐が出る程にまで忌み
嫌う存在だった。

一体、どれ程の時間を過去に縛られていたのだろうか？

つい今しがたまで向けられていた、訝しげな言葉から恨み節話。

更には剣呑な雰囲気放つ言葉などが次第に収縮していった。

男が訝しげに辺りを見回す。その動作の後に続いたのは……男が
全く予期せぬ賛辞の数々だった。

「拳帝！ 拳帝！ おめでとー！」

「くっそ！ よかったな、拳帝！ まんまと生きて抜け出やがって

……俺の金を返せっ！」

「おい！ 俺と勝負しろ！ 俺と！」

中には賛辞とも言えない言動も含まれていたが、言葉の調子は共
通して明るなものだ。

【拳帝】の自由を祝う言葉がみると周囲の人間へと伝染して
ゆき――、気付けば割れんばかりの歓声が、公共市場となっている
大通りを揺らしていた。

闘技場の中で受けたものとは異なる歓声に包まれ、男は細い目を

さらに細める。表情こそ変えないものの、男には思考が追いつくまでの時間が暫く必要となっていた。

——成る程、これが“自由”ってやつか。

五年間もの歳月の中、憧れては憎んだ形の無いモノを遂に得た。という実感が今更ながら胸中に湧き上がる。

そうだ、俺は自由になったのだ。

奴隸身分から解放されて、今日から立派な一市民だ。
最下級の下等市民権だろうが、知ったことか。

誰に憚る必要があるというのだ？

男は自分自身へと数度言い聞かせ、大きく息を吸う。肺一杯に新鮮な“外”の空気を満たした後には、立ち止まっていることすら馬鹿らしく思えてきた。

知らず知らずのうちに口端が上がり、不敵な笑みが浮かぶ。

男は粗末な麻布で織られた服の上からでも判るほどの、鍛え抜かれ盛り上がった胸板を張る。腕に馴染んだ鋼鉄製の籠手ごと大きく腕を揺らし、再び道の真ん中を堂々と歩き出した。

歩き始めてすぐさま、押し寄せる波の如く集まった群衆に男は取り囲まれた。それでも関係無いとばかりに、男は足を動かし続ける。

各種色とりどりの歓声は既に爆音と化し、男の鼓膜を激しく刺激する。

男は負けじと声を張り上げ、足を止める事無く大声で叫んだ。

「うるせえぞ！ この馬鹿野郎どもがッ！ 寄って集って人様の鼓

膜を破る気か！

おい、よく聞けクソ野郎共！ 今日俺が自由を勝ち取った素晴らしき日よ！ 俺に言葉を向ける位なら、もっと盛大に馬鹿をやれ！ 商人は破格で売れ！ 客はケチらず、そいつらから気持ち良く買え！ 他の集った連中は飲んで歌え！ 俺の解放記念日だ！ 俺が認めてやる！
売って買って……何でもいいから騒ぎやがれッ！」

先程の歓声に負けない音量で、男が叫び終える。その頃には、その場に居合わせた全ての人間が男の言葉に聞き惚れ、静寂の時が漂った。しかし、それも僅かな間だけだった。

次の瞬間には――市場全体の熱気が、一瞬にして最高潮にまで沸き上がる。

一瞬にして沸点へと達した市場は、大混乱へと見舞われた。

商人は商品とは全く関係無い拳帝の名前を出し、売りの声を張り上げる。

客は値段も聞かずに即買いの一言を叫ぶ。

市場に居る全員が同じ様に、訳がわからない熱に浮かされたかのように暴走を始めた。

群集を擦り抜ける様にして、男は人混みから離れた場所を目指す。彼等を嚇けたのは他ならぬ男自身なのだが――、まるで熱狂したかのように騒ぎ立てる観衆の存在は素直に鬱陶しかった。

叩かれたり、身体を触られたり、服を引っ張られたり……

声だけならばまだしも、まるで『触ると御利益がある』と巷で噂される石像の様な扱いをされている事が何よりも気に食わなかったのだ。

余程自分の名を挙げたいのか、中には人混みに紛れナイフで刺し殺そうとしてきた者までいた。ある程度の腕は避けてかわしてゆくも、暴力を向けてくる相手には容赦する必要など無い。男は自分に危害を加えようとする者の手を折ってやる。三人目までは妙な関心を覚えたものの、四人目以降からは何も感じず痛めつけた。

そんな事を暫く繰り返しつつも進むんでいるうち、市の立っている大通りから道を二本ほど外れてしまっていた。相変わらず注目は受けるが、それでも人並みもまばらになっている。

ようやく閑静な場所へと出たと確認した後に、男は短く息と共に悪態を吐いた。

「つたく……うざってえんだよ！」

朝からまだ何も食べておらず、空腹も相まって苛立ちがより一層募る。

適当に大通りを歩いて目に入った定食屋にでも入ろうと思っていた矢先の出来事だったので、仕方が無いといえば仕方が無いのだが……後悔はしない性分の男も、群集を自ら煽ってしまった今回の件に関しては、流石に少しばかりの反省を覚える結果となった。

——構わず二、三人殴り飛ばして強引に食いに行った方がよかったか……

少々物騒な後悔をしながらも、何か食べる物が売ってそんな場所を求めて男は歩き続ける。

暫く歩いていると、道端の一角で行われていた興味深い光景を捕らえた。男にとって馴染み深い雰囲気放たれており、同時に食欲

をそそる匂いも嗅覚が捕らえる。

殺伐とした雰囲気には興味が無かったものの、匂いにつられて自然にそちらの方へと男の足は赴いていた。

「いい加減にしろよ！ このクソジジイ！」

最初に耳へと入ってきた言葉は、余り上品なものでは無かった。

遠目で眺めていた時には既に分かっていたのだが、露店と思わしき場所を挟んで二人の男性と店主らしき初老の男が向き合っている。簡単な木の枠組みで縁取られた店は、これもまた簡単な布で屋根を形成していた。夜になるとこれらを畳み、手間をなるべく省いて移動できる様に造られたものである。

四つ程小さな椅子が置かれており、店主と客を隔てる台の上には何種類かの串に刺さった焼かれる前の肉がそれぞれ皿に盛られている。

見る限りそれは何処にでもある、ごくありふれた軽食を出す露店だった。

闘技場で男が毎日のように聞いていた下品な罵声の類は、どうやら二人組の方が一方的に飛ばしているらしい。素行も当然の事ながら、揃って汚れが目立たない黒地の服を身に纏っているのと、これ見よがしに腰に差している短剣を見る限りは……どう見繕っても、真つ当な職の人間からはかけ離れていた。

「だからよ、誰に断ってココで商売してるんだ？ って言ってるんだよ！ え？」

「誰に断わる」もあるか！ こっちはキッチンと筋を通して商業ギルドで許可貰って、ここで商売してるんだ。お前達みたいな、ワケの分からん奴等の許可など必要無いわ！」

「何だと？ おいこらジジイ！ もう一回言ってみる！ お前こそ、何の肉だか分からないゴミ肉売ってんじゃ……」

店主に絡んでいた二人組のうち、大声で怒鳴っていた方が唐突に言葉を止めた。脅しめいた文句を最後まで続けることは出来ず、代わりにその身体が僅かに揺れる。

「吼えるな、胃に響く」

短く低い声で、【拳帝】と呼ばれる男は吐き捨てる様に呟いた。

拳帝が男にしたことは至極単純な行動である。

叫ぶ男の肩を左手で強く掴み、飛ばないよう固定する。直後に籠手を嵌めた拳の甲で、間抜けな顔を殴り飛ばしただけのこと。身体を固定されていた為、男はその場で気絶したに過ぎない。簡単に説明してしまえばそれだけのことだが、単純ゆえにその技は脅威に値する。何故なら全ての動作を一動作で、更には殴られた張本人ですら何が起こったのか気付かせず気を失わせる程の早業だったのだ。

そして殴った張本人が手を離すと……男はまるで糸が切れた操り人形のように、地面へと倒れ付した。

店主も二人組の片割れも、一瞬何が起こったのか理解出来ずに呆然とする。そんな彼等の様子などは関係無いとばかりに——拳帝と呼ばれる男は、露店に置かれた椅子へと勢い良く腰を降ろした。

「こいつは美味そうだ。オヤジ、適当に三本程焼いてくれないか？」

腰掛けた椅子の横で倒れている男を踏みつけながら、呆然と立ち尽くしたままの店主へと注文をする。

「け、けっ……け……」

店主は口を開閉しながら言葉を告げようとするものの、余程驚いているのか満足に喋れない。

「け……拳帝、だよな？ あんた」

「おうよ」

驚きで目を見開きつつも、やっと口から飛び出した店主の問い掛けに対し、拳帝は軽く肩を竦め一度だけ返事をした。

「僕はあんたが拳帝って呼ばれる前から、ずっとあんたに賭け続けてたんだ……しかし、他ならぬあんたが食いに来てくれるなんて……待ってる、今焼くから三本と言わず好きなだけ食べていってくれ！」

「いいのか？」

「勿論だとも！」

拳帝の返事を待つ前から、店主は嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。網の上に何本か並べていた串を裏返し、調理台に敷き詰めていた火含石（かがんせき）に水を掛けた。保温も兼ねて温まっていた火含石は水に反応し、さらに熱を発して赤く染まる。

すぐさま漂う肉の焼ける香ばしい匂いが、拳帝の鼻をくすぐった。

「やはり良い匂いだ。口の中に涎が溜まってくる」

「味は任せてくれ！ あんたが“参った”って言うまで焼いてやるよ！」

「ほう、そいつは楽しみだ」

のんびりと世間話でもするかのような口調で店主と会話を交わすが、拳帝の脚は変わらず殴り飛ばした男を踏みつけたままの姿勢である。

踏まれている男と共に店主へと詰め寄っていたもう一人の男はと

いうと……暫くの間は、事の次第を理解出来ず茫然自失となっていた。低く脅す声色で数度声を掛けるも、まるで自分達など眼中に無いとばかりに繰り広げられる拳帝と店主の会話の間には割り込めない。

存在を無視されている事に関して、男の表情には腹立たしさが募る。拳帝の脚に踏まれた連れの口から漏れた呻き声が耳に入り、ついに鬱積された苛立ちは爆発したらしい。男は椅子に腰掛ける拳帝の太い腕を掴んで、大声で捲し立てた。

「さつきから話し掛けてるのに無視とは、いい度胸だてめえ！　よくもバズをつ！」

「……うるさいゴミだと思っていたが、何だ？　貴様等みたいなゴミにもちゃんと名前があつたのか？」

「うるせえ！　奴隷上がりが調子に乗ってんじゃねえぞ！？　ここを誰のシマか知ってモノ言ってるんだろうなあ！」

「知らん。ゴミの臭い唾が肉に飛ぶとメシが不味くなる、黙れ」

「ゴミとは何だ！　もっぺん言ってみろ！　ああ！」

顔を真っ赤にして怒鳴り立てる男に対して、拳帝は何も言葉を返さなかった。代わりに店主が差し出した串を三本受け取り、そのうち一本を口へと運ぶ。

無視をされた男が怒って掴んだ腕に力を込めるが、それをいとも簡単に振りほどき、返事代わりに脚へと力を込める。短く潰れた蛙のような惨めな声が、再び足元から漏れた。

「お、美味しいな」

予想していたものよりも遥かに上質な味に、拳帝は思わず感嘆の声を漏らしてしまう。

店主を脅していた男達は“何の肉だかわからない”と言っていたが、それは極々ありふれた塩が振りかけられた鶏肉だった。表面の

皮はパリッと焼かれ、油が充分にのった鶏肉を噛めば肉汁が口一杯に広がる。

奴隷身分の時に肉を味わえたのは週一回、管理する役人が独断で指定した日のみであった。それでも、最低限の肉体と栄養を保たなければ『観客に対して見栄えが悪い』という馬鹿げた理由からである。大抵与えられたのは――働けなくなつた農耕牛か、駄馬の肉が精々だ。それこそ、何の肉だかわからない代物である。

久しぶりに味わう濃厚な味に、拳帝は目を細めて味を楽しんだ。

一方、再び無視をされた男にはそんな拳帝の気持ちなど到底知る由も無い。相も変わらず無粋な大声を発し続ける。

「俺達を散々コケにしゃがって……！　いいか、てめえは奴隷だつたから知らないだろうが、ここはなあ！　俺達アルギニン一家の……」

「おいゴミ、食事の邪魔だ。静かにしろ」

「ゴミじゃねえ！」

最後の警告を含めた拳帝の一言ですら、男は真意に気付かない。ついには腰に吊るしていた短剣に手を伸ばした。だが即座に抜ける位置にへと吊るしていたにも関わらず、男が短剣の柄を手にするよりも速く拳帝が動く。

「怒りつぱくなるのは腹が減っている証拠だな。こいつは俺の奢りだ……食べ」

若干楽しそうな色を声に含ませた拳帝は、手に持っていた二本の串肉を目では追えない速度で、かつ的確に男の口へと突っ込んだ。

男は短剣を抜く間も無く不意を突かれ、熱々の肉汁垂れる串肉を口どころか喉元深くにまで差し込まれる羽目となった。

「ウゴツフツ！」

「どうだ？　美味いか？　美味いだろう？」

「アガグツ……ウゲツツ！　ヴヴェー！」

「ちゃんと話さないか、顔と一緒に行儀の悪い奴だな」

冗談めいた口調で告げる拳帝の問いには、男が今まで感じた事もないような殺気と威圧感が放たれていた。熱で焼ける喉の痛みすらも忘れ、男は恐怖のあまりコクコクと何度も頷き返す事しかできなかった。

男の様子を見た拳帝は満足そうな笑みを浮かべ、一つ大きく頷いて真顔へと戻った。だが、殺気と威圧感は未だに放ったままである。

「よし。返事としては、なっちゃいないが……まあ今回は許してやる」

拳帝は頭を上下に激しく振り続ける男の髪を掴んで停めると、男の顔を間近で覗き込むように睨み付けた。

「さっきはゴミと言って悪かったな。お前はアルギン一家ってヤツの下っ端なんだな？　それなら、一つお前達のお友達に伝えておいてくれないか？　“誰に断わって、此处を自分達の縄張りだと名乗ってやがる。ここで暴力を飯の種にしたいのならば、今度からは俺に断りにきやがれアルギン野郎”……ってな。ちゃんと伝えるんだぞ？」

拳帝の細い鳶色の目は、鋭い眼光と共に殺意の光が宿っている。それは時間が経てば経つ程に、男の恐怖心をさらに煽っていった。心底から恐怖を味わった男は、拘束されていた頭を離され、力無く地面へと膝を落とす。口をだらしなく開け、中に入った串が落ちた後にようやく正気に返ったらしい。熱に麻痺した口から泡にも近い涎を撒き散らしながら、言葉にならない言葉を発するだけだった。

大通り程では無いものの、騒ぎを聞きつけ集まった人垣の中から失笑が漏れる。

嘲りの目と失笑を受け、男の顔はさらに青冷める。

男は死人のような表情のまま――半ば腰が抜けた動作で拳帝が脚を乗せていたもう一人の男を抱え、慌てながらも去ってゆくことしか出来無かった。

「ん、折角貰った二本が台無しになっちまったな。オヤジ、悪いが俺は“遠慮”という言葉が大嫌いだな……また焼いてくれないか？」
「あ、ああ。別にいいが拳帝……アンタ、あんな事を言っちゃまって構わないのかい？」

「なあに、構わんさ。今日から俺も晴れてこの街での生活だからな。一般市民としての義務ってやつだ」

二人の男が去ってゆき、騒然とする周囲の空気をもともせず……拳帝は齒に挟まった肉を串で剥きながら、店主に向かってのんびりと言い放つのだった。

「ああ、そうだ。オヤジ、あんたにも伝えたい事があったんだ」
「何だい？」

話題を自分へと振られ、店主は串を焼いていた手を思わず止めて拳帝の方へと顔を向ける。座っているにも関わらず、店主よりも背丈が高い拳帝は嬉しそうに目を細めていた。

「あんた、随分と俺を熱心に応援してくれてたんだろ？ だったら、俺のもう一つの呼び名を知ってるよな？」

「勿論知ってるも！ 【ノスフェラトゥ（不死者）】 だろ！」
「そう、それだ」

店主の返事に満足したのか拳帝は頷き、手にしている串を店主へ

と向ける。

「俺は【拳帝】よりも、そっちの名前の方が気に入ってるんだ。次からはそう呼んでくれ、俺は【ノスフェラトゥ】のヴァルトってんだ」

言葉の締めとばかりにピン、と指で串を弾く。

それが使用済みの串を入れる容器の中に弧を描いて収まった様子を見て、【拳帝】とも【ノスフェラトゥ】とも呼ばれる男——ヴァルトは可笑しそうに笑う。

そして……ヴァルトは店主が手渡すのを忘れていた新たな肉串を網から勝手に取り、さも当然の様に口へと放り込むのであった。

(1 - 2) 女を抱く拳

少しすえた匂いが狭い部屋一帯に漂う。

野性的な匂いの原因は、火が落とされたランタンから漏れる獣脂の臭いだけでは無かった。

薄暗い部屋の中で男女が睦み合う声と、ベッドの軋む音だけが響く。

木製の窓は開け放たれており、月明かりが室内に居る男女を照らし出す。抑えもしない互いの嬌声は外へと漏れ響いている筈だが、付近に住む人々が気にすることは無い。

何故なら――、この地区一帯が“そういう場所”だからだ。この地区では悲鳴ですら、耳に入っても人々は見向きもしないだろう。

月の光が照らす女の裸体は小刻みに揺れ続け、白い肌は熱でほんのりと赤く染まり、玉の様に浮いた汗が身体の線に沿って流れ落ちる。腰程まである長い髪は少し乱れ、身体の動きに合わせてフワリと揺れる。仰向けとなった身体の上に女を跨らせていた男が激しく腰を突き上げる度、女の幾度目かになる艶やかな嬌声が荒い息と相成って部屋に響き渡った。

「く、出すぞ……ッ！」

「駄目……そんなに激しくしたら、私もまた……」

最後の言葉代わりに、女は一度だけ大きく跳ね上がると男の肩に爪を食い込ませる。そのまま果てて身体を支えきれなくなったのか、

汗が滲む男の胸にぐったりと身を預けた。

筋肉質な身体の上に柔らかい女の肌を押し付けられた赤毛の男――ヴァルトは無言のまま口端を上げた笑みを浮かべ、女の髪を愛しそうに優しく撫でた。

ヴァルトが娼館へと赴き――アンジェリカと名乗る娼婦と共に、娼館の二階にある宿へと入ったのは陽が落ちてから暫くしてだった。

娼館に到着するまでにヴァルトの姿を見て商売も忘れて興奮する油売りの小僧や、仕事を終え娼館や賭場のある特別地区へと赴く労働人達から浴びる注目は相変わらずだった。そんな視線を鬱陶しく感じていたヴァルトを気遣い……アンジェリカが部屋で食事を取れる様に取り計らってくれたのには、素直に感謝を覚えた。

宿に入るなり湯場を借りたヴァルトは身体を洗い丹念に髭を剃ると髪に油を塗り、身なりを整える。数年振りに身なりを整えたヴァルトの見た目は先程までの薄汚い粗野な風貌から一転、歴戦の戦士や熟練の傭兵を連想させるまでの変貌を遂げていた。

渡されていた上質なローブを身に纏った後で食事が到着したのも、おそらく頃合を見計らっていたのだろう。口数少なく食事を頼張るヴァルトを、アンジェリカは妖艶な笑みを浮かべて楽しそうに眺めていた。

陶器のような白い肌と長い黒髪が神秘的な魅力となっており、対照的に大きくぱっちりとした黒い瞳は少女の面影を色濃く残している。その美貌は娼婦らしい化粧の匂いも薄く造られた美しさでは無く、天然がつくりだした美貌を讃えていた。

大人びた妖艶さと少女の様な愛くるしさ。アンジェリカは相反するその両方の魅力を兼ね備えた、不思議な女だった。

容姿もそうだが、立ち振る舞いや雰囲気を見ている限り……娼館の主人が『ウチで一番の娘』と、薦めてきたのも頷ける。

昼間食べた串肉とはまた違う、手間を掛けられた料理と自由になつてから初めて呑む酒に舌鼓を打っていたヴァルトだったが……突然アンジェリカに唇を塞がれ、ベッドへと押し倒された後に――店主の言っていたアンジェリカの評価を、再度違う角度から思い知らされる羽目となった。

もはや何度目かも分からない情事を終えて、ようやくヴァルトは人心地つく。

ベッド脇に備え付けられたサイドテーブルに置かれている葡萄酒の封を切った。瓶に口をつけ、直接それを流し込んで喉を潤す。葡萄酒はとうに生暖かくなっていたが、上質なそれはいささかも味は落ちていなかった。

身体を起こしたヴァルトの脇では、未だにアンジェリカはベッドに身体を投げ出し荒い息を吐いていた。アンジェリカは力の入らなくなった体を捻り、喉を鳴らして葡萄酒を飲むヴァルトを見上げる。ヴァルトは無言でその顎に手を添えると、アンジェリカの唇を自分の口で塞ぐ。そのまま、含んでいた葡萄酒を口移しで飲ませた。

「……んっ」

愛らしい声が喉の奥から漏れ、アンジェリカは驚いたように黒い目を見開く。

口の中に流し込まれた葡萄酒を飲み終えた後で妖艶な表情を浮かべ、お返しとばかりにヴァルトの舌を絡め取った。アンジェリカの

可愛い悪戯に、ヴァルトは柔らかく暖かな舌に導かれるように、舌を深く絡めていった。

「……まさか、もう一回？」

「いや……」

絡め合った舌を戻し、離れたヴァルトの口から引く糸をアンジェリカは名残惜しそうに細い指で拭った。拭った指で自らの唇をなぞりながら、アンジェリカは呟く。

ヴァルトは短く否定した後、深い溜息を吐いた。

「久し振りとはいえ、少し張り切りすぎたな」

「そうね、拳帝様だったら……激し過ぎて私、壊されちゃうと思ったもの。闘技場だけじゃなくて、ベッドの上でも本当凄いのね」

「……まあな」

多少なれども水分を取ったことで、体力もかなり回復したのだろう。アンジェリカはまるで猫の様に素早く、しなやかな肢体を引き起こして微笑む。そのまま上半身を起こしているヴァルトの厚い胸板に自身の豊満な胸を押し付け、甘えるように凭れ掛かった。

筋肉質なヴァルトの胸から次第に軽く這わせる指をおろし、最終的に下半身へと手を添える。先程までの濃厚な口付けの所為で起こったヴァルトの僅かな変化を確認した後は——アンジェリカは少女の様に目を輝かせ、胸元へと鼻を摺り寄せた。

「本当、凄いのね。さっきから何度もしてるのに、まだ元気なんだから……」

「それだけ、女の身体に飢えていただけさ。いや……違うな。“お前の身体が素晴らしいからだ”とでも言った方が気分がいいか？」

「あら、嬉しい。でも……それを言っちゃったら、効果は半減しちゃうわよ？」

「なに、口での失態は体と態度で取り戻すのが俺の流儀だ。まあ……」

…コイツは全くの嘘では無いから、失態では無いと思うがな」

ヴァルトは苦笑混じりにそう言うと、艶やかなアンジェリカの黒髪を撫で下ろす。心地良さそうに目を閉じて、されるがままになっているアンジェリカを、優しく自分の顔へと引き寄せた。

一方アンジェリカも抵抗するどころか待ってましたとばかりに、少し荒れたヴァルトの口に紅く湿った唇を合わせる。

その口付けは先程の様に深い接吻とは異なり、互いが軽く触れる程度で終わった。

「あら？」

期待外れだったのか、アンジェリカが疑問の言葉と共に形のいい唇を尖らせる。その可愛らしい拗ねた素振りを見て、ヴァルトは思わず苦笑を漏らした。

「……残念ながら、今夜は打ち止めた。今日は色々とありすぎて、疲れちゃった」

「なあに？ 拳帝様が降参だなんて。私、不戦勝で勝っても嬉しく無いわ」

「そう言うな、一時休戦なだけだ。……少しだけ、眠らせてもらっても構わないか？ それからならば、アンジェが失神するまで犯つてやる」

「んもう……何よ、思わせぶりな素振りだけ取って放置するなんて、酷いわ……」

「すまん。だが本当に……眠気が限界でな。自由になったからといって、少々浮かれていたのかもしれない」

ヴァルトは目頭を揉みながら睡魔と格闘するも、とうに限界を迎えた眠気は抑えようが無い。その様子は傍から見ても充分なものであり、アンジェリカも諦めがついたらしい。

「分かったわ、寝かせてあげる。けど……、次に目が覚めた時は覚

えてらっしやい」

「は……ははっ、お手……柔らかに頼……」

言葉を最後まで言い終わらぬうちに、ヴァルトは瞼を閉ざした。アンジェリカの柔肌を滑り、ベッドへと巨体を倒れ込ませる。

静寂の中、規則正しいヴァルトの寝息と外から聞こえる夜虫の鳴き声を耳に――。アンジェリカは暗い部屋で微笑みを浮かべていた。

「おやすみなさい、拳帝様……」

笑みを浮かべ、アンジェリカは僅かに開いているヴァルトの口へと自身の唇を当てる。触れるだけの軽い口付けを交わしても、寝息を立てているヴァルトは何も反応を見せない。

ヴァルトが眠りに落ちていている事を確認すると――アンジェリカは座っているベッドの上で、少しだけ身体を折って腕を伸ばす。

慣れた手つきでベッドの隙間から、音も無くそれを引き抜いた。

白く細い手に握られた細身の刃は、月の明かりに反射して冷たい光を放つ。

凶器を手に持ち月に照らされたアンジェリカの表情からは、先程まで浮かべていた女性らしい艶やかな笑みは消え、まるで人形のような無機質なものとなっていた。

躊躇いすら無く、無駄の無い洗練された動作でアンジェリカは刃を頭上高くに振り上げた。ヴァルトの首筋に目掛け、切っ先を勢い良く下ろす。

しかし――

アンジェリカが感じたものは、刃が肉へと沈み込む感触でも、命が途絶える前に対象の喉から上がる血に混じった声でも無い。アンジェリカがそれらを感じ取る前に直感が働き、無意識のうちに刃を止めていた。

娼婦としてのものか、暗殺者としてのものかは分からない。いずれにせよ今まで直感に幾度も助けられたアンジェリカにとって、それはどうでもいい事だった。

「ねえ、起きてるんでしょ？」

相手の命を絶とうとしていたにも関わらず、悪びれた素振りなど何一つ見せずに、アンジェリカはヴァルトに問い掛ける。その口調はむしろ嬉しそうで――手に持つ刃さえ除けば、悪戯がバレた子供の様に嬉々としたものだった。

「……ああ」

ヴァルトは閉じていた瞼をゆっくりと上げて短く答えるだけで、自分を殺そうとしているアンジェリカに対して怒る気配など微塵も無い。

「どうして……？」

「何がだ？」

面倒臭そうに顔だけを上げ、ヴァルトはベッド脇で刃を手にしたまま立っているアンジェリカを見上げる。

「さつき貴方が飲んだ葡萄酒には強力な薬を入れておいたのに……まさか、私と同じように解毒剤でも飲んでいたのかしら？」

「いや……闘技場に長く居過ぎるとな、色々と不便な身体になっち

まう。余りにも俺が負けないからと、ここ一年程は趣向を変えて様々な魔物だのを相手にさせられていた。勿論、中には毒を持った奴等もいてな、そいつらの毒を喰らっているうちに……毒が効かない身体になっちまっただけさ」

「そう、それじゃあ普通の人間用の薬なんて効きっこ無いわね……全く、貴方ってそんな所まで規格外だったの……誤算だったわ」

「そういう事だ、商売の邪魔をして悪かったな」

「いえいえ、これは私の落ち度だもの」

長い髪を揺らして笑うアンジェリカの表情は、あくまで明るく楽しそうである。だがヴァルトの視線はその美しい顔では無く、僅かに震えている手を静かに見据えていた。

「どうした？ それを振り下ろさないのか？」

「気付かれているのに殺すなんて、そんな無様な真似はできないわ」
自分が試されている事に気付いたのか、アンジェリカは手に持っていた細身の刃を後ろに投げ捨てた。溜息交じりに首を横に振ると、つまらなさそうにベッドへ形の良い尻を落ち着かせ脚を投げ出す。

「私はね、これでも一流を自負しているのよ。相手に気持ち良くなつて貰って、幸せな気分のまま……自分が殺された事すら気付かない様に、優しく命を刈り取ってあげる。それが私の美学なの」

「そいつは、すげえ美学だな」

「……それ、本心から思ってる？」

「俺は野郎を騙しても、美女を騙す様な真似はしない。それに……そついう拘りを持つてる奴は嫌いじゃないぜ」

疑う様な眼差しを向けてくるアンジェリカに対し、ヴァルトは肩を竦めて答える。返答が不満だったのか、アンジェリカは頬を膨らませてヴァルトを睨み付けた。

「だから……気付かれた時点で私の負け、ってわけ。そういう事」
「そういう事、か……」

軽い冗談を言い合う様な口調だが、アンジェリカの告げた言葉の真意は重い。

死を覚悟した暗殺者——アンジェリカの潔い態度を前に、ヴァルトは苦笑を浮かべて両腕を頭の後ろへと組んだ。いくら月明かりがあるとはいえ、天井までは見えない。それでも、ぼんやりと何処を見るわけでも無くただ鳶色の目を瞬きさせる。

「ねえ、最後に一つだけ教えて」

「何だ？」

「最初から……気付いていたの？」

真剣なアンジェリカの口調に対し、ヴァルトは暫く言葉を頭で巡らせた。

「いや……気付く気付かないとか、俺は別にどうでもよかった。ただ……この馬鹿な体が、気配に関しては過剰に反応しちまってな」

「気配？ 殺気なんて私は……」

自分の手腕を一流だと自負している為か、アンジェリカが怒った様に反論する。

死を覚悟こそすれ、最期の時まで自分が犯した欠点を追及したいのだろ。そんな彼女だからこそ、ヴァルトは飾る事無く素直に言葉が続けた。

「違う。アンジェ、お前は完璧だった。……完璧すぎたのさ」

「何よそれ？」

「完璧だからこそ、気配を完全に消していた。だが……人としての気配まで完全に消す行為は、殺気を出してるのとどう違う？」

「……成る程ね。一流すぎるのも考えものだわ……けど、納得できたわ。有難う」

「話は終わりか？」

「ええ、もう全ては終わり。……一流の最期としては、悪く無い終わり方ね」

「そうか、じゃあ……」

ヴァルトは言葉尻を濁し、頭の後ろで組んでいた腕を解く。脇に座っていたアンジェリカの手を掴み、そのまま細い腰を抱き寄せた。驚いて息を呑むアンジェリカを無理矢理寝かせて、強引に自分の胸元と背中を密着させる。自分の状況が理解し難いのか、戸惑うアンジェリカの首筋へと何も言わずに顔を埋めた。

香水と女の香りの中に混ざり合った、微かな雄の匂いがヴァルトの鼻腔をくすぐる。腕の中で戸惑うこの魅力的な存在に対し、さらに己の匂いをつけてやろうかとも考えるが——結局、散々満たされた性欲以上に、睡眠に対する欲が勝る結果となった。

「ちょっと、何のつもり？」

「今度こそ俺は寝る。起すなよ？　もし、殺したいのなら……今度こそ起さないように頼む」

「私を生かすっていうの？　次こそ本当に殺すかもしれないのに？　ねえ、聞いて……」

驚くアンジェリカの抗議は、ヴァルトの手がその豊満な胸を揉みしだく感触によって遮られた。

「構わないさ、女の胸で死ぬのも悪くない。それもお前みたいなの飛びきり上等の女なら尚更だ。そう……男の夢、ってやつだな」

呟きながらも、ヴァルトの無骨な手止まらない。まるで壊れ物に触れるように、優しく力強く柔らかな胸を揉み続ける。しかし、その勢いも少しずつ衰えていき——完全に止まる頃には、アンジェリカの耳元で静かな寝息をたて、眠りについていた。

「呆れた……本当に酷い人ね」

溜息と共に吐かれたアンジェリカの呟きは、諦めの気持ちよりも呆れが色濃く現れていた。

「“起こさずに殺せ”って……貴方相手じゃ無理だって思い知ったばかりなのに……」

身体を起こそうとしても、背後から腕を回されている以上それすらもままならない状態である。

そして何より……眠りに落ちる直前まで身体を触られていた為に、アンジェリカの下腹部が疼きに近い熱を宿し、火照った身体が離れる事を拒んでいた。

「こんな事なら、いつそ殺された方がマシだったわよ……」

今まで出会った事が無い程にまでアンジェリカを魅了する強烈な雄の匂いと、粗暴な外見とは裏腹に自分を大切に扱う男に抱かれ、アンジェリカは毒付く。

だが、文句言ったところで眠っている人間の耳には届く筈も無く、アンジェリカは悶々とする身体と行き場を失った気持ちで、ヴァルトの手の甲を一度だけ叩いた。

「何よ、起きないじゃない……馬鹿」

一瞬寝息が途絶えるが、すぐさま耳元を擦る感触に、アンジェリカは拗ねた様に呟くのだった。

(1 - 3) 優しさ溢るる拳

眠りの世界へと落ちてから、どれ程の時間が経っていたのかは分からない。

何か夢を見ていた様な気もするが、それも今となっては定かでは無い。

不意に感じた気配の所為で、ヴァルトは睡眠から現実へと引き戻された。

既に頭からは睡魔の欠片は取り払われ、意識は覚醒している。それでも目は開かず、耳に意識を集中させて周囲を確認した。

ヴァルトの肌が感じ取ったものは、明確な殺意だった。

但し、それは寝る直前まで腕に抱いていたアンジェリカのものでは無い。今でも腕に掛かっている僅かな重みと、温もりは目を開けなくとも分かる。

ヴァルトへと注がれている殺気は部屋の外——鎧戸も閉めず、開け放たれた窓の外からだ。

場所こそ漠然ながらも把握するが、殺気以外のものが何時自分へと降り掛かってくるかまでは分からない。事態に備えるかの様に、ヴァルトの身体は自然と動く。

ヴァルトの僅かな動きを悟ったのだろう。腕の中で温もりを発していたアンジェリカの腕が伸び、ヴァルトの太い首へと回された。うなじを這う髪感触と首筋に掛かる息に負け、ヴァルトは閉じていた瞼を開ける。

「あら、起きちゃったの？」

ヴァルトを殺そうとしていた美しい暗殺者は、間近な距離で微笑みながらそう言う——ヴァルトの唇に軽く自分の唇を押し付けた。

「さっきまで可愛い寝顔を見せてくれていたのに……本当、貴方って敏感なのね」

「あそこまで無粋な殺気を放たれていたらなあ、死体でも目が覚めちまうだろうよ」

「……確かにそうね」

そう言うときアンジェリカは甘える子猫の様な仕草で、ヴァルトの胸に鼻を摺り寄せる。

「私が仲間を呼んだ、っていう考えは無いのかしら？」

「一流の暗殺者が、お友達と仲良く手繋いで暗殺か？……面白くない冗談だ」

無言で胸に顔を埋めたまま首を横に振るアンジェリカに対し、ヴァルトも何も言わず柔らかい黒髪を撫でただけだった。

「ふふっ……心配いらないわ。この場所は私の縄張りだって明確にしてあるから、手出しは出来無いの。そうね……私に対しての嫌がらせみたいなの、って言えば分かって貰えるかしら？」

「嫌がらせ？」

アンジェリカの放った言葉の意味が分からず、ヴァルトは上半身をベッドから起すと訝しげな表情を浮かべる。

「そう。貴方を私に殺させない為に、わざと殺気を放ってるのよ。それで貴方を警戒させて、私の仕事を邪魔しようって算段なんじゃないよね……」

「成る程。だが、辛気臭いな……暗殺者っていうのは、皆そう陰険な奴等なのか？」

「一流どころ以外はああいう感じよ、だからアイツらは……良くて

「二流止まりなのよね」

「……へえ」

ヴァルトはそれ以上は何も聞かず、ベッド脇に置いたままだった葡萄酒に手を伸ばした。残りを一気に飲み干し、豪快に口から噎気を吐く。

アンジェリカもシーツを払いのけて、ベッド脇に腰掛ける。ヴァルトと並んで座り、スラリと伸びた綺麗な足を組んだ。こちらは緩慢としたヴァルトの動作とは対照的で不機嫌そうに形の良い唇を尖らせていた。

「それにしても不愉快だわ。下劣な三流野郎のクセに……」

続けて「殺してやろうかしら？」と可愛らしく小首を傾げて呟いた物騒な台詞が耳に入り、ヴァルトは思わず苦笑を漏らす。そして宥めるように、アンジェリカの肩を抱き寄せた。

「止めとけ、止めとけ。馬鹿に構うと馬鹿がうつる。それに、あの程度の奴にお前の身体を好きにさせるのは……俺が不愉快だ」

「あら」

アンジェリカが嬉しそうにヴァルトを見上げ、言葉の真意を確かめようとする。だがその時、既にヴァルトは腰を屈めており、アンジェリカの視線を退けていた。

「ああいう輩はな……」

床に落ちていた“あるもの”を拾い上げ、それを手にしたヴァルトはアンジェリカへと顔を向ける。相変わらずの仏頂面を浮かべてはいるが、その細い目は獲物を狙う獣の様な輝きを放っていた。

「こうしてやるのが……一番だ」

ヴァルトが手にしていたものは、アンジェリカが床へ投げ捨てた細身のダガーだった。

柄を逆手に握り込み、素早く窓から身を乗り出す。

窓の外は、未だ夜明けには至らない暗闇が広がっている。にも関わらず、ヴァルトは前の五ルード（約五メートル程）先も見えない闇を暫く見据えて、相手に狙いを定めていた。

狙いを決めるや否や——ヴァルトは迷う事無く、一切の無駄を省いた動作でダガーを大きく振りかぶった。それを闇に閉ざされて、見えない筈の路地へと投げつける。

刃がまだ微かに残る月明かりに反射し、一瞬だけ鈍く輝く。

ヴァルトがダガーを投げた一呼吸後、静寂な闇の中から何かに突き刺さる生々しい音と、声を殺し切れずに叫ぶ男の声が二人の耳に入った。

抑える事を忘れた足音は途中で何度か途切れ、やがて静寂が訪れる。

先程までのあからさまな殺気は、小さくなる足音が聞こえる前からとうに消え失せていた。

「殺したの？」

アンジェリカの言葉にヴァルトは犬歯を見せ、獰猛な笑みを浮かべて振り返った。

「いや、殺す価値もない。だがあの様子じゃあ……“男”としては、死んだだろうな」

喉で含み笑いを漏らしながらも放つヴァルトの言葉で、アンジェリカは全てを悟ったようだ。愚かで不運な同業者を哀れに感じたの

か整った顔は一瞬曇るも、やがてその表情はすぐに和らぐ。次の瞬間には、心地の良い声で笑い声を部屋に響かせていた。

「あらあら、ちょん切られちゃったの？ 哀れな男ね。そうだ、次会ったらウチの店番として雇ってあげようかしら？ ふふふっ……」
「それにしても……さっきの馬鹿はともかく。お前みたいな暗殺者を何人も雇うあたり、依頼主は随分と太っ腹だな？ もしくは余程、俺の事を恨んでるのか……」

機嫌良く笑うアンジェリカを横目で見ながら、ヴァルトは眉を顰めて自分の命を狙う人物に対して考えを巡らせた。

成功報酬で暗殺者を雇うには、暗黙の掟が存在している。

一度に一人しか雇わない、それが裏の世界での掟であった。無論これは、少しでも危険な橋を渡る稼業に携わっている者ならば誰でも知っているような範囲での常識であった。

“暗殺を謀るのに、一度に雇うのは一人”

これは裏を返せば——多数の暗殺者を雇うという事は、依頼した暗殺者の腕を信用していないと言われるのと同義語である。

暗殺者と呼ばれる稼業についている人間は、自尊心が高い者が多い。

アンジェリカが例外というわけでは無く、何らかの拘りを持って仕事を行う輩が多いとヴァルトは昔聞いた事があった。もしも、複数の者に暗殺を依頼していると暗殺者が知ったのならば、決して良い顔はしないだろう。事実過去に、暗殺者が複数雇われている事を知った暗殺者達が依頼人の敵に回った事件が何度もあったらしい。

勿論、複数雇う場合も状況によりは存在する。これは、前金で暗殺依頼を行う場合のみ可能とのことだ。但しそれでも、単独で行動

する暗殺者を雇う事は出来無い。分配という形を容認出来る三流の夜盗崩れ程度を雇えるのが関の山である。

これらの事例を考えれば考える程、答えを導き出す道が塞がってしまう。

前者を疑えば、アンジェリカがここまで落ち着いている事に納得がいかない。

後者を疑えば、ヴァルトから見ても腕利きである彼女を雇う事など到底出来る筈も無い。

ヴァルトの頭に浮かんだ疑問を、娼婦が持つ特有の感覚で鋭敏に嗅ぎ取ったのか……アンジェリカはヴァルトの傍に近寄ると、悪戯っ子のような笑みを浮かべて瞳を覗き込んできた。

「ねえ、何を考えているのか当ててあげる。今、貴方は“誰に命を狙われているか”では無く“何故、複数の暗殺者が襲ってくるのか？”って、疑問を抱いてるのでしょうか？」

「……よく分かったな」

「私の副業は、さつき貴方も堪能したでしょ？ 私が今まで、どれだけ人の内に抱え込んだものを見透かしてきたと思っているの？」

アンジェリカはそう言つて、自慢げに豊満な胸を突き出す。

「その疑問、答えてあげてもいいわよ？」

未だ服も身に纏っていない胸は勢いで揺れ、柔らかさと豊満さをより強調させた。

「何だ？ 身体に聞け、つてか？ それなら俺も望むところだが……」

「普通そつくる？ もう……起きたてなのに元気なんだから」

冗談めかして言ったヴァルトの言葉に、アンジェリカは唇を尖らせて答える。冗談ついでにヴァルトは目の前で揺れる胸へと腕を伸ばすが、その手は簡単に叩き落とされた。

「こいつは手厳しいな。だが、冗句は置いといて……理由は話してくれると有難い。俺にはどうも……さっきの馬鹿とお前のような一流どころが、同時に同じ人間を狙う理由がさっぱり分かりそうにも無い」

「答えは簡単よ？ 私は誰かの依頼を受けたわけではないし、さっきの馬鹿も依頼を受けて殺しに来たって訳でも無いわ」

「謎掛けか？ ……さらに分からね。何だ？ “誰が一番に俺を殺すのか？” って、暗殺者の中でそういう賭けでも始めたのか？」

「そうね、そんな感じ」

「見ての通り俺は馬鹿だからよ……意地悪は止めて、さっさと教えてくれないか？」

「あらあら……」

両手を挙げ、素直に降参の意を示したヴァルトを見上げるアンジェリカは笑顔を浮かべていた。だがその顔は笑っていても、大きな眼には暗殺者としての鋭い眼光が宿っている。

「意地悪は言つて無いわ、さっきの貴方の言葉は正解よ？ 【拳帝】またの名を【ノスフェラトゥ】のヴァルト。……今、貴方の首には賞金が掛けられているの」

「自由になったその日に、めでたく賞金首かよ……」

「そう。だから今——この街にいる腕に覚えのある暗殺者や、賞金稼ぎ達がみんな貴方の虜になっちゃってるのよ」

あくまで笑みを絶やす事無く笑いかけるアンジェリカの話を理解するにつれ、ヴァルトの顔に明らかな嫌悪が色濃く現れる。

「あー……つまりは、これから“ああいう馬鹿”が、雁首揃えてやってくるって事か？」

「あら、拳帝様は御不満？ モテていいじゃない」

「お前みたいな良い女に付け狙われるならば大歓迎だが、ムサイ男共に狙われるなんて……ぞっとしないな」

寝癖が付いた髪を何度も指で掻きつつも、口に笑みを浮かべたヴァルトはさも当然の様に言い放つ。だが世辞の類を聞き飽きているのか、アンジェリカは微笑みながら「あら有難う」と一言返しただけだった。

「でもこの街で、貴方に挑むような一流所は知れてるわ」

肩を竦めるヴァルトの方には目を向けず、上を仰ぎ思い出す素振りを見せながらアンジェリカは細い指を折り矢継ぎ早に言葉を続ける。

「賞金稼ぎなら“鉄球ゴーディ”に“双頭黒犬ラース”と、暗殺者なら“針十字スレイ”や“影踏シャルワ”……それに私こと、“毒蟲惑アンジェリカ”が有名かしら？ あとは名前も知られていない二流三流もいいとこね？」

指折り数えて告げられてゆく名前の数々に、ヴァルトは心底うんざりした表情を浮かべる。

アンジェエのような、男にとって素晴らしい美学を持つ者に命を狙われるなら気分もまた違うのだろうか……名から漂ってくる印象の限り、到底そのような容姿はおろか、手段も穏やかなものでは無いだろう。

男、それも——陰気な性質の輩に寄ってこられて喜べる趣味は持ち合わせていない。ヴァルトは沈む気分を抱え、気持ちを切り替えようと異なる話題を振ることにした。

「賞金首ねえ……一体いくら掛かってるんだ？」

ぼつりと漏らしたヴァルトの言葉に、アンジェリカは向き直ると無言で指を二本立てる。

「へえ、金貨で二十枚とは豪気なことだ」

「残念……銀貨で二百枚よ……」

「……おい」

言い辛そうに顔を曇らせながらも訂正するアンジェリカの言葉は、最初ヴァルトは自分の聞き間違えかと思い耳を疑った。

「そんな顔しないで頂戴よ、私だって金額は言いたく無かったんだから……」

ヴァルトの変化を見て、アンジェリカは戸惑いながらも首を横に振る。その仕草を見ても、目の前にいる暗殺者の言葉は嘘偽りが無いものだろう。

今度こそ、ヴァルトの顔は固まった。

ウグルゼ王国の王都でもある此处、アリユテーマの街に住む平民の平均的な年収は銀貨で一五〇枚程度である。質素な生活をすれば一年を過ごすのに充分足りうる額とは言え、賞金額となれば銀貨二百枚というのは異例の金額であろう。

金貨の場合、時事の相場によって変動に拠るが……平均的には銀貨五百枚前後に対し、金貨一枚と考えられている。

ヴァルトが愕然としたのは、何も自分の存在を買いかぶっていた事でも驕りでも無い。ヴァルト以外の人間がこの額を聞いたとしても、皆同じ反応を表すことだろう。

銀貨二百枚という額。それは——文明的にも発展したウグルゼ王国が所有する闘技場の覇者であり、拳帝ともノスフェラトゥとも呼ばれた男の首に掛けられる賞金にしては格安どころか、捨て値もいところの額であった。

自分でも知らず知らずのうちに、ヴァルトは殺気を漲っていたらしい。表情も硬直ですら通り越し、怒りで頬が熱を持っていた。

ヴァルトの反応は、自身の命を平民の年収より少し上程度に考えられた者としては当然のものだろう。だが、傍にいるアンジェリカとしては居心地の悪さを感じずにはいられない。

変化していったヴァルトを宥めるように、当惑しながらもアンジェリカは言葉を発した。

「ちょっと、そう殺気立たないでよ……」

「いや……お前、そりゃあ……俺の命をそこいらの浮気旦那でも殺すような値段しか掛けられてないんだ。自分がそんな目に合ってみるよ？ 殺気立ちもするさ……」

「ま、まあそうだけど……」

ヴァルトが怒りを滲ませる理由も充分承知してかアンジェリカは戸惑いつつも、最後に「でもね」と付け加える。

「逆に貴方だからこそ、この値段で十分なのよ？」

「はあ？ 納得いかんぞ。いくら俺が奴隷あがりの男だからって……」

……

「そういう意味じゃなくて、そもそも……あなた勘違いしていない？ これが殺しの依頼ならむしろ依頼人が殺されても文句は言えない値段だけど、賞金だと意味合いが変わってくるのよ？」

アンジェリカは部屋に満ちる濃密な殺気に気圧されるも、負けじとヴァルトへと詰め寄った。ヴァルトも幾分落ち着き、眉を顰めて素直に疑問を返す。

「どついう事だ？」

「あのね、まず最初に私の名誉の為にも言っておくけれど……賞金稼ぎにしろ暗殺者にしろ、無秩序に誰でも狙っていい訳じゃないわ。必ずそこに第三者の存在が関わっているってこと。そうじゃないと

賞金稼ぎもただの無頼者に、暗殺者もただの殺人者に代わってしま
う」

「まあ、そうだよな」

「けれども……そこに賞金が掛けられると話が変わってくるの。例
えそれがどれ程に安い金であろうとも、殺す大義名分を得られるの
よ。そして、貴方は金じゃ計りきれない価値がある存在なの」

「……“名声”ってやつか？」

不機嫌さの余り、さらに細い目を細めながらヴァルトが漏らした
言葉にアンジェリカは一度だけ大きく頷いた。

「そうよ。“闘技場最強の男”“剣聖をも超える拳帝”“不死者ヴ
アルト”を殺した人間は、一生仕事に困ることはないでしょうね？
しかも、割の良い仕事だけを選び好みだってできる。売り込めば
仕官の道だって望めるわ。それ位、貴方は有名で特別な存在なのよ」
「……とんだ迷惑だ」

怒りの矛先をアンジェリカに向けるわけにも行かず、再びベッド
の上に寝転びながらヴァルトは大きく溜息を吐いた後に悪態を吐く。

「全く……これまで生きるか死ぬかって事に必死だったのに、自由
になったらなっただで結局これか？ 本当、世知辛い世の中だな……
くそっ」

ヴァルトは手で目を覆いながら天井を仰いだ。

素直に真正面から襲って来るのならば、打ち倒せばいい。だが人
の命を奪う事を生業としている人間の場合、そうで無い者が大半で
あることをヴァルトは知っている。

悪態の言葉も尽き、今はただ溜息しか出てこなかった。

「御愁傷様。なんなら賞金を掛けた相手を教えましょうか？」

「いや……、今は良い。折角良い女と居るにも関わらず、これ以上は無粋だろ？ そんな事は次にアホ面晒してやってくる奴にでも“聞いて”おくさ」

「まあ怖い」

「そんな事よりも、だ」

芝居掛かった仕草で口に手を当てて笑うアンジェリカの方へと身体を向け、ヴァルトは意地の悪い笑みを浮かべた。

「……口直しに約束通り、アンジェを“天国”って所に連れて行ってやりたいんだが？」

「あらっ、ふふふっ。ちゃんと約束、覚えてたのね？ 嬉しい」

ヴァルトはアンジェリカの腰に手を回して、自分の胸元へと引き寄せた。

綺麗に収まったアンジェリカの耳元へと口を寄せ、耳朵を軽く噛んでやる。甘い息を漏らしながらも、アンジェリカがそれを拒む事は無かった。

「ちゃんと今度は、私が満足する“天国”に連れて行って頂戴。もしも、私が満足出来無かったら……今度は私が貴方をさっきの馬鹿みたいにしちゃうわよ？」

「そいつは、勘弁してほしいな……」

苦笑を浮かべながらも放つヴァルトの言葉など、まるで聞こえないかの様な素振りでアンジェリカは強く胸に顔を摺り寄せてくる。

素肌の胸に押し当てられた頬も心地良いが、顎に指を沿え上を向いた唇に口付けをする感触の方がヴァルトには何倍も魅力的に感じてしまう。

口付けが開始の合図だとばかりに、ヴァルトも何も言わずアンジェリカをベッドに押し倒すと、均整の取れた肢体へのしかかった。

かくして——朝靄立ち込める娼婦街に、一際甲高い嬌声が響き渡るのであった。

朝霧も晴れ、活気が出始めた朝の街中をヴァルトはゆっくり見回しながら歩く。

横には腕を組み、寄り掛かるような形でアンジェリカが連れ添っていた。

露店に商品を並べている最中の露店商や、朝一番に仕入れの荷を載せて大通りを走る馬車などが激しく行き交っていた。それらが展開する光景の中、腕を組みながら寄り添って歩く男女の姿は、少々場にそぐわない光景となっている。だが、本人達には全くそれを気にする素振りは見られなかった。

アンジェリカは地味な服を身に纏っているも、美しい顔立ちと服越しからでも分かる魅力的な身体はやはり道行く男性の目を惹くらしい。一方のヴァルトも闘技場に居た頃とは違い、身なりは整えているが体格の良さが相まって二人の存在をさらに浮き立たせていた。

「言ってくれば、ご飯ぐらい作ったのに……」

ヴァルトの太い腕に胸を押し付けながら、呟くアンジェリカの声には不満の色が混ざっていた。朝方まで続いた情事の所為で乱れた髪と化粧も今ではすっかり整えられ、その余韻はもはやどこにも残されていない。

「いや、昨日も思っていたんだが……久し振りに自由な飯を食べるんだ。狭っ苦しい部屋で食うよりかは、お天道様の下で食う飯の方が美味く感じてな」

ヴァルトはそう言いながらも、アンジェリカが掴んでいない方の手に持っていた細長いパンへと齧り付いた。

「ん、やっぱり美味しいな」

次々と齧り付き、歩きながらだというのにも関わらずあつという間に一本を食べ終える。口を動かしながらも即座に袋を持つアンジェリカに催促をするヴァルトを見て、アンジェリカは溜息を一つ吐いて新しいパンを手渡すのだった。

それは早朝から働く商人相手の露店で購入したのだが、匂いにつられ買ってみると意外と美味しい事に驚いて、ヴァルトが迷わず袋一杯買い込んだものだ。今ではアンジェリカが持つ食べ物を入れる麻袋が、一杯になる程にまで詰め込まれている。

肉と香草を煮込んだ汁にじっくり漬け込み、そこからさらに焼き上げたパンは実に香ばしいものだった。表面は固くなっているものの、中はしつとりとしており何本食べても飽きは訪れない。無論、それなりの手間が掛かっているだけに、値段もそれ相応のものではあった。一本辺りの値段すら普通の金銭感覚を持つ人間ならば躊躇うような値段である。

袋一杯にもなるパンの値段を聞いても臆する事無く、ヴァルトが銀貨二枚を即決で払う光景を見ていたアンジェリカなど呆れ果てていた程だ。

「……ヴァルトは早くお嫁さんを買った方がいいわね……」

「んあ？ 急にどうした？」

横目にじつとりと睨みつけるアンジェリカに、ヴァルトは心底不思議そうな視線で返す。

「いくら貴方が強くても……金銭感覚は人並みでいい、って事よ」
「何だそりゃ？」

全く以ってヴァルトが言葉の真意を理解していないのを悟ったのか、アンジェリカはこれ見よがしにもう一度深く溜息を吐いた。

「お、あそこにも美味そうなもんが……」

「ちよつと！ まだ、パンが残ってるでしょ！」

再び匂いにつられ、そちらの方へと向かおうとするヴァルトだったが、強い静止の声と共にアンジェリカに腕を引っ張られた。

「なんだよ？ 大丈夫だって、まだ食えるから……」

「絶対ダメ！ もう……パンを食べ終わるまで他の物を買うのは禁止！ いいわね！？」

「……あ、ああ。分かった……」

「本当に分かってるの？ 全く……お金を稼ぐっていうのが、どんなに大変な事か……」

ヴァルトへと詰め寄るアンジェリカの気迫は凄まじく、彼女と出会って初めて感じたものであった。アンジェリカはその勢いに乗ったまま「何時までも露店商のところにいるといい力モになる」と愚痴りながら露店通りから離れようと、半ば強引にヴァルトの手を引っ張ってゆく。

力では明らかに勝っているヴァルトも、流石に女の剣幕には敵わない。

戸惑いを見せつつもヴァルトはアンジェリカに引き摺られるように、街の広場に向かう道へと向かうべく露店通りを後にした。

暫くの間歩いていると飲食物が並ぶ露店通りから抜け、そこら一帯に漂っていた香ばしい匂いと人々の喧騒も随分と収まってきた頃

だった。

アンジェリカが何かに気を取られたのか、ふと立ち止まる。

「……どうした？」

黙々と麻袋の中に収められたパンを消費していたヴァルトも、アンジェリカの引つ張られるままにされていたので必然と歩みが止まる。急に足を止められた理由が分からず、隣に立つアンジェリカへと目を向けるとヴァルトの方を見る事無く、その黒い瞳はある一点へと向けられていた。

夜明け前に現れた暗殺者を撃退した際に物騒な理由を聞いていた所為もあり、自分を狙う何者かの存在をアンジェリカがいち早く察知したのかという可能性をヴァルトは疑ったものの、どうやらそうでは無いらしい。

素早くアンジェリカの視線を追った先に見えた者は、暗殺者や賞金稼ぎからはほど遠く離れた者達だった。

アンジェリカが向ける視線の先——露店通りに隣接する路地裏には、少女が幼子の手を繋いで立っていた。

おそらく、露店通り一帯に漂う匂いに誘われてきたのだろう。

路地の入り口から物欲しげに露店を伺う姿は、ボロを纏った浮浪児であることは一目でわかる。年の頃は三歳かそこの幼子の手を引いている少女も、容姿を見る限りまだ幼い表情をしている。彼女達が姉妹であろう事は、くすんで伸びた金色の髪と似通った顔立ちからすぐに分かった。

道行く人々の視界に少女達が映っているのは勿論だが、皆その少女達が見えないものの様に扱い素通りしてゆく。ヴァルトとて、アンジェリカが立ち止まらない限りは恐らく視界に入ったとしてもさほど気には留めなかっただろう。

ヴァルトが闘技場へと幽閉される前から、街にこの様な浮浪児が立っている姿などさして珍しい光景ではなかった。

世の政など知る由も無い場で過ごした五年の間で、ヴァルトが得た時事の動きなどはたかが知れている。前王が崩御し新王に代わった程度の知識しかヴァルトは持ち合わせていない。だが……例えば誰が国を支配しようとする、その恩恵を受ける者などはほんの一握りの人間にしか過ぎない。という事は、自由を束縛される前からとうに知っていた世の理であった。

街に住む者としては、日常の一光景にしか過ぎない浮浪児達に何故関心を抱くのか？

隣に立つアンジェリカの意図が、全く以って分からない。ヴァルトは再び視線をアンジェリカへと戻した。

娼婦と暗殺者の二面を持つ美しい女性は、路地に佇む二人を見つめたまま目を細めている。何を考えているかは解らないものの、その整った顔に浮かぶ表情はヴァルトが最も良く知っている——とある感情を露にしたものだった。

「あのね……」

近くにあるものを見据えているにも関わらず、その先に何かを見ている様な目のままアンジェリカはポツリとヴァルトにしか聞こえない小声で呟く。

「私、孤児だったのよ。その日に食べる物も苦勞して……。あの歳位の時は私もあの子達みたいに、ああして露店を見ていたわ」

口に出して呟いているのは、ヴァルトに聞いて欲しいからなのだろう。だが、生憎ヴァルトはアンジェリカの言葉に対する返答は持ち合わせていない。

その場凌ぎに適当な相槌を打つのは簡単だろうが、それは決して

アンジェリカの求めているものでは無いだろう。だからこそ黙ってアンジェリカの独白に耳を傾けていると、腕を抱く力が僅かに強くなった。

「やっぱり私がああして立っていても、道行く人は誰も見向きもしなかったわ。そして私は、毎日神様を呪い続けた……。どうして、私がいる場所はこんなに薄暗いのだろう。どうして、光は決まった所にしか当たらないのだろう……。ってね」

一通り話し終えて我に返ったのか、アンジェリカは自分でも驚いた様な表情で軽く首を振った。続いて苦笑を浮かべると、ヴァルトから腕を放して目を伏せる。

「……ごめんね」

「いや」

一時の感情に任せて吐いた自分の過去を、笑みと共に消し去ろうとしている努力が伺える。そんなアンジェリカにヴァルトは一言だけ言葉を返すと、アンジェリカの髪を軽く撫でた。

アンジェリカもそれ以上は何も取り繕う必要が無いと理解したらしい。軽くヴァルトに頷いた後は、成り行きを見ていた少女達の方へゆっくりと歩み寄っていった。

少女達には先程の会話など聞こえている筈も無く、急に近付いてくるアンジェリカに対し明らかな怯えを見せた。少女は咄嗟に幼子の手を引いて、一旦は路地の裏へと引き返そうとする。だがその足は、アンジェリカが浮かべる優しい笑顔を見て止まった。

「そんなに怯えなくてもいいわ」

久しく人の優しさを感じていなかったのだろう、戸惑いながらも少女達は手を伸ばすアンジェリカの方を呆然とした様子で見上げている。

「私は何も酷い事なんてしないから。ね？　そうだ、お名前を教えてくださいませんか？」

アンジェリカの浮かべる優しい笑顔と差し伸べられた手を見る限り、自分達に危害を加える相手では無いと判断したのだろう。それでもアンジェリカから幼子を庇うように、少女が前へ一歩踏み出ると小さく震える声で言葉を放った。

「わたし、マリエラ……こっちが妹、の……ソフィア……」

「そう……マリエラとソフィアね？　教えてくれて有難う。私はアンジェリカって言うの。友達にアンジェって呼ぶわ、二人にもそう呼んでもらえると嬉しいんだけど……」

「アンジェ？」

「ええ」

アンジェリカはマリエラと名乗った少女に愛称で呼ばれると、嬉しそうに何度も頷いた後は地面へと屈む。

再び二人へと手を伸ばすが、今度は警戒される事が無いと分かったのか……アンジェリカはそのままフケと垢が浮き、汚れた姉妹の髪を何の躊躇いもなく撫でた。

新しい一日を告げる朝の街は、少し離れた場所に居る人の話し声など馬車の音や様々な雑音によって掻き消される。ヴァルトの元を離れ、路地に座り込んで浮浪児の姉妹と話しているアンジェリカの声など今ではもう耳に入らない。

ただ……アンジェリカの笑顔につられ、暗かった少女達の表情が次第に明るいものへと変わってゆく様子だけはヴァルトがいる位置からでも充分伺う事はできた。

先程アンジェリカが浮かべていた表情は、彼女達を過去の自分と

重ね合わせていたものだったのだろう。

あの時、アンジェリカがヴァルトに謝ったのは——過去を不用意に思い起こす愚かしさに気付き、迂闊にも他人の前で発露してしまった事に対してだったのかもしれない。とヴァルトは考えていた。

本来ならばあの時に諫め、過ぎ去ってしまった事を思い出す愚かしさを嘲笑してやればよかったのかもしれない。或いは、アンジェリカもそれを望んでいたのかもしれない。

アンジェリカとマリエラとソフィア。

今しがた知り合ったばかりにも関わらず、全くそれを感じさせない三人の姿。

それを遠い昔に見た光景と重ね、目を細めたまま眺めている自分に気付いているヴァルトが——過去を思い起こし自嘲していたアンジェリカに対し、何も言える筈が無かった。

(1-4) 狙われた拳

アンジェリカはテーブルに片肘を置き、頬杖をついている。

空いている方の手で磨り減って光沢を放っているテーブルの木目をなぞりながら、深く深く溜息を吐いた。

「お腹つてのは……そりゃまあ、減るものだけど……」

アンジェリカの目の前には、スープと肉を片付けた皿が幾重にも積み重ねられている。

その数はすでに数十枚と重なり、今やテーブルの一角は塔のようになってしまっていた。

「それにしても……本当、よく食べるわね……あなた“達”」

溜息を吐きながらも、アンジェリカは何度目か分からない感嘆の言葉を溢す。

次々と出される料理を片っ端から征服し、皿で出来た塔の建設をしているのはヴァルトではなかった。ヴァルトとテーブルを挟んで向かい側——アンジェリカの隣に座っている、幼い姉妹がヴァルトに負けじと必死で口に食べ物運び続けていた。

最初の頃は面白がつてアンジェリカも微笑みながら様子を眺めていたのだが……皿が重ねられてゆくにつれ、その表情は驚きと呆れの気持ちへと変化していった。

朝の街で出会ったマリエラとソフィアと名乗った幼い姉妹を連れて、アンジェリカが娯館へと戻ったのは今から一鐘(二時間)程前

の事だった。

湯を沸かし二人を風呂に入れた後、服を着せて身なりを整えてやった姉妹の姿は見違える程に可愛らしいものだった。腹を空かせているという事もあり、そのまま二人は食堂へと案内された。先程外から昼の初鐘を告げる鐘の音が聞こえたので、昼食には丁度の時間だろう。

丁度火含石の準備を終えていた事もあり、食事はすんなりと出てきたのだが……先程からそれは物凄い勢いで消化され、まさに“戦場”と呼ぶに相応しいものとなっていた。

「ちょ……おめえ！ その肉は俺のだろう！？」

「そんなの誰が決めたの？ これは私の！」

「俺が決めた！ 今決めた！」

「……大人げない……」

肉が乗った大皿をフォークで指し示し、腰を浮かせて抗議するヴァルトを見てアンジェリカがボソリと呟いた。マリエラとソフィアも無言でヴァルトを眺め——女三人の冷たい視線が突き刺さる。これには流石のヴァルトも、浮かしかけていた腰を萎らしく降ろす他無かった。

「まあまあ、食えるに越した事は無いさ！」

反論する言葉も見当たらず、バツの悪そうな顔を浮かべたヴァルトに代わり弁明の言葉が出たのはその時だった。その人物は食堂の扉を勢い良く開けると同時に現れ、威勢のいい声と共に香辛料のよく効いた香ばしい匂いも雪崩れ込んできた。

「アンジェもアンジェだよ、そう責めてやりなさんな！ これだけ図体でかいんだ、それ相応に大飯喰らいなのも合点がいくだろ？」

ほらよ、旦那。追加をやるから、コイツで手を打ちな！」

部屋に入ってきたのは啖呵に劣らず、恰幅のいい中年女性だった。豪快に笑いながら、盆に載せた厚切りの焼いた肉をヴァルトの前へとドンと置く。

「助かった……俺の味方は姐さんだけだぜ」

心底安心した様な口調でヴァルトが呟くと、その言葉を聞いた女性性は満足気に頷く。目尻の皺が目立つ笑顔を浮かべ、返事代わりに大柄なヴァルトの肩を盆で遠慮する事無く叩いた。

ヴァルトが臺も立つこの女性——娼館の台所を預かる人物を“姐さん”と呼ぶのには、理由があつた。この女性は見掛け通り、気も相当強く……仮にも“おばちゃん”などと呼ぶと鉄のお盆か、刃物を容赦無く飛ばしてくる物騒な人物であつたのだ。

昨夜アンジェリカと共に宿へと宿泊した際、部屋に食事を持って来たのが彼女だったが、その際、口の悪いヴァルトがうつかり“おばちゃん”と呼んでしまい……有無も言わず包丁を投げつけられる羽目となつたのだ。

それ以来、ヴァルトも彼女を“姐さん”と呼ぶ様に心掛けている。

「駄目よ、マゼンダさん。男は甘やかすと図に乗るんだから！」

「ちよつと待て……俺は駄目亭主か何かか？」

「何よ、私は本当の事を言ってるだけじゃない」

「……駄目亭主なんだ」

「だめていしゅー！」

ソフィアが気に入った単語を繰り返す様子は素直に可愛らしいが、内容が内容である。先程ヴァルトが『唯一の味方』だと言っていたマゼンダですら、ソフィアが叫ぶ言葉に対し大笑いを響かせていた。

幼子にさえ馬鹿にされた様な錯覚を受け、ヴァルトはがつくりと肩を落とす。それでも、無言の抗議とばかりに、目の前に置かれた肉へと齧り付くのだった。

「ねえ、貴女達。聞きたい事があるんだけど……いいかしら？」

若干聞き辛そうな表情でアンジェリカが話を切り出したのは——
ようやく食欲が満たされたマリエラとソフィアが、満足気な笑顔を浮かべて互いの顔を見合わせていた時の事だった。

「その……貴方たちの御両親はどうしたの？」

浮浪児になった理由は大凡の検討はついているのだろうが、アンジェリカは敢えて聞いたのだろう。彼女達に両親の影が感じられないのは、最初に出会った時からヴァルトも薄々感じ取っていた。
肉を奪い合う相手が脱落した事により、ヴァルトは口に料理を運ぶ手を若干緩めながらも事の成り行きを静かに見守ることにする。

浮浪児になる理由など、少しばかり年齢を重ねてきた人間ならば誰もが容易に想像出来ることだ。

恐らく、この姉妹も親に『捨てられた』類なのだろう——多少の語弊があるが、『親が捨てた』と表すよりも、村が『捨てた』と言

った方が相応しいかもしれない。

飢饉などで口減らしが必要な際や、両親が死んで孤児となった場合、村にとつての不利益になる者を村から街へと捨てに来る場合があった。そういう経過を経た浮浪児の大半は、住居も無く街へと住み着く結果となる。勿論、市民権などはないので長期に渡る不法滞在は違法行為なのだが……広い都市でこれらに該当する人間を取り締まるには、膨大な人手と費用が必要となる。結果として、何処の国でも同じ様に実質黙認されている状態だった。

アンジェリカの言葉は重く、先程までの明るい喧噪の余韻すら消し飛ばすものだった。

室内は気まずく、重い沈黙に支配される。

二人の姉妹——妹のソフィアは何を聞かれているのか解らず、きょとんとした表情を浮かべているが、姉のマリエラは口をキュッと強く結び、黙り込んで俯く。一方のアンジェリカも、マリエラの態度を見て言葉が告げない事が伺えた。

「言いたくねえなら、別に言わなくていいんじゃないか？」

部屋に漂う沈黙を一蹴したのは、ヴァルトが放った言葉だった。

さして興味が無い素振りを取っていたが、気まずい空気の中で食事など進むわけが無い。なによりヴァルトは——俯いて眼を伏せているマリエラを前にして、無関心を決め込む気にはなれなかった。だからこそ、思わず口走った一言でもあった。

「人には聞かれたくねえ事の一つや二つあるもんだ」

「……ヴァルトの言う通りね」

ヴァルトが漂う雰囲気になて放った一言を、自分への叱責と感じたのだろう。アンジェリカもヴァルトの言葉にすんなりと同意して謝罪を述べた。

「……ごめんなさいね、答えたくないのなら答えなくてもいいわ。ただ、今から言う言葉だけはちゃんと答えて欲しいの。いいかしら？」

そう言ってアンジェリカは、幼い姉妹の顔を一人ずつゆっくりと見た後に笑顔を浮かべる。

「今日から、貴女達二人に此处で暮らして欲しいのだけど……どう？」

「……えっ？」

アンジェリカの言葉が余程意外だったのか、マリエラは俯かせていた顔を上げて驚きの表情を浮かべる。

「何を驚いてる？」

満面の笑顔で頷いて承諾するソフィアとは異なり、驚いて言葉を失っているマリエラに対して、ヴァルトは口に料理を運びながらも平然と言い放った。

「何処の世界に親切心だけでお前等みたいな浮浪児に風呂を与え、食事を与える物好きがいるんだ？ いいか、お前達は拾われた。そして風呂に入れられ、飯も与えられた。その代価は支払うべきだろ？」

“働かざる者食うべからず” ってやつだ

「ちよつとヴァルト！ こんな小さい子に向かって……他にも言い方ってものがあるでしょ！」

齒に衣着せぬ物言いで告げるヴァルトの言葉に、アンジェリカが慌てて訂正を付け加える。

「えつと……御免なさいね。このおじちゃん馬鹿だから、余り気に

しないでね」

「……おい」

「マリエラちゃんとソフィアちゃん。貴女達にどんな事情があるにせよ、貴女達だけだとこの街では生きていけないわ。でも勘違いしないでね、私は貴女達に強制するつもりも無いから質問させてもらったの。だから……よく考えて選んで。私は貴女達に毎日食事を与える事も出来る、お風呂だって毎日入って貰っても構わない。勿論、此処に住むのなら掃除とか洗濯とか……色々と仕事してもらっけれども」

「掃除とか洗濯……ねえ」

「……余計な事、言わないで」

年齢的には余りにも無理があるとは思いつつ……てつきり彼女の職業柄、アンジェリカの示唆する“仕事”の内容をあれこれと推測していたヴァルトが思わず感嘆の声を漏らす。だがそれも、立ち上がった隣の席へと腰掛けたアンジェリカに脚を思い切り踏まれた拳句、睨まれてしまったので続く事は無い。今度こそ、ヴァルトは肩を竦めて黙った。

「急に色々言つて混乱したかもしれないけれど、選ぶのは貴女達よ。此処に住んで働くか……それとも、拒否をして今まで通りの見窄らしい浮浪児に戻るか。今日は泊まってもらつて、答えはそれからでもいいから……ね？」

アンジェリカは、マリエラ達の瞳を正面から見据えて問い掛けた。傍から聞けば、厳しい言葉に聞こえるかもしれないが……言っている事は曲げられない事実のみである。

浮浪児達には市民権はおろか、人権ですら存在していない。
マリエラやソフィアのような子供が路上生活を続けてゆけば、当然

の如く欲に塗れた汚い大人達の手によって餌食となるのは目に見えていた。

この国では市民が奴隷を持つ事を禁じているものの、何事にも抜け穴というものが存在している。養うと甘い言葉で子供達を誘惑して、後は奴隷同様に扱う者なども世に掃いて捨てる程いることだろう。

大きな街に行けばよくある話だ。二束三文の金さえ与えれば、奴隷とは認められず雇用しているものと見なされ、国も手出しは出来ない。

手元に置かなくとも、貴族に“奉公に出す”という手段を取り、幾ばくかの金を得る者も無論いることだろう。実の親でもその様な者は少なくは無い。“奉公”と云えば響きはいいだろうが――大概は、貴族に性奴隷として娘を売り飛ばす事を示している。

マリエラとソフィアの幼い浮浪児……しかも女の子が今まで無事であったのですら、ヴァルトは奇跡的だとも思えた。

勿論、それらの事情を解つていてもアンジェリカは、二人の意思を問わずにはいられなかったのだろう。何をするにしても、自ら選ばずに一方的に選択をさせるとするのは奴隷と同じだ。本来ならば、有無も言わず選択権さえも奪うところだが、そこはアンジェリカという女性の優しさが充分に感じられた。

「あ……アンジェ、さん」

椅子から立ち上がったマリエラが顔を上げ、正面へと座ったアンジェリカを見据える。幾分大きめな服の裾を握る手は震え、結んでいる口と表情も硬い。だが意を決したのか、その蒼い瞳には強い意志が宿っている事が伺えた。

「私は、お父さんが帰ってくるまで待たなきゃいけないから……で

も、ソフィアだけは……」

「お父さんを待つてる？ マリエラ、一体貴女……」

マリエラの言葉を聞いて、アンジェリカの目が驚きに見開かれる。続けて理由を問うべく口を開くが、それは最後まで言い終わらぬうちに閉ざされた。

酒場と食堂を兼ねた娼館の一階――外の通りに面した扉越しに、突然強い殺気が放たれ察知したアンジェリカが言葉を止めたのだ。無論、ヴァルトもそれを察知していたのだが……皿に残された料理を片付ける作業を淡々で行うだけで、アンジェリカの様に表立って警戒する事は無かった。

「邪魔するぜ？」

凄まじいまでの殺気が放たれた直後、扉が粗野な大声を伴って乱暴に開け放たれる。

扉の向こうから現れたのは声と同様、粗野な外見の大男だった。体格もさることながら、頭を綺麗に剃り上げジャラジャラと音が鳴る背嚢を背負って現れたその姿は、見るからに荒事専門の雰囲気を身に纏っていた。

「……“鉄球のゴーディ”……何の用かしら？」

「おうおう。俺様の名前をご存じたあ、嬉しいねえ。あんたがアンジェって女か？ それとも俺様の名前が有名になっただけか？」

「自惚れが過ぎるわね。それと私を呼ぶ時は“アンジェリカ”と呼びなさい」

嫌悪の色を滲ませた視線で大男——ゴードイとを睨み付けながら、アンジェリカは静かに立ち上がると自然な動作で二人の少女を庇うように立ち位置を変えた。

一見すると、娼館に入ってきた客を出迎えただけの接客にも見える。ヴァルトはその気配さえ感じさせない、自然なアンジェリカの動作に内心感嘆を覚えた。

それでもヴァルトは自ら動く事をしなかった。食後の茶を啜り、我関せずとばかりにどっかりと椅子に座ったまま傍観を決め込む。

「……悪いけど、用が無いならお引取り願うわ。ここは私の縄張りよ？ それとも……貴方はそんな事も知らないお上りさんの？」「がっはっははっ！ 気の強い女は嫌いじゃねえぜ、なあアンジェリカ？」

氷の様に冷めた視線と言葉をアンジェリカから受けてもなお、ゴードイは愉快だとばかりに大声で笑い飛ばした。

「なに、そう邪険にすんなよ、今日は客として来てんだ。それとも……何だ、あんたが俺様のお相手でもしてくれるのか？」

「生憎と、私は特別な客専門なの。それに今はお昼だからそっちの商売は開店前よ」

「それは残念だ。じゃあ飯だけでも食わせてもらうか……勿論、嫌とは言わねえよな？ 俺様は客なんだ」

アンジェリカが放つ嫌悪の意図を汲み、ゴードイはなおかつそれを逆手に取った発言を行う。アンジェリカが無言で肯定を渋々示した後、ゴードイは醜悪な顔に笑みを浮かべさらに言葉を続けた。

「ま、たまたま闘技場上がりの奴隷が臭くて潰すかもしれんがな？」

今度は明確な殺意が座っているヴァルトへと向けられた。

ゴーディが放つ大声と殺意はハッキリとしたものであり、陰悪な雰囲気をも素早く悟った二人の姉妹はアンジェリカの背後へと隠れる。ヴァルトも醜悪な笑みを浮かべる賞金稼ぎの矛先が自分へと向けられた事により、渋々と視線を上げた。

「おい……」

「なんだ？ 気安く人間様に話しかけるなよ。闘技奴隷の豚が……」
「鉄球のゴーディ」ってのは、なかなかイカした名前だな。そいつは……頭がツル禿で鉄球みてえに光ってるから、そんな二つ名になったのか？」

木製のカップに入れられた茶を一気に飲み干し、それをテーブルに置いてヴァルトは不敵な笑みを浮かべる。ヴァルトがさりと云つてのけた嘲りの文句を前に、ゴーディは暫くの間言葉を失って立ち尽くした。

「ん……だと！ 俺様は禿じゃねえ！ これは剃ってるんだよ！」
「なんだ、剃ってるのか。道理で禿のわりにはカビみてえなもんがついてるなと思ったんだ。……そうだ、今日から“カビ頭のゴーディ”にしてみちゃどうだ？」
「ぐっ……ぐっ……」

顔を頭の頂まで真っ赤に染め上げながらも、必死に自分の頭を指差し抗議するゴーディだったが……ヴァルトの毒舌は止まらない。最初は喉の奥で笑っていたヴァルトの声も次第に堪え切れなくなり、大声へと変わっていった。

「ぶっ……ははははははっ！ おい、見ろよ！ カビ頭が茹で蛸になつたぞ……いや、この場合は“茹で蛸が腐ってカビが生えたぞ”がいいか？ くっくくく……こいつは傑作だ！」

「ちよつと、もう……やめてよっ！ ゴーディ……あなた、プフッ……ここは食堂なんだから腐った物は御法度よ……」

怒りで顔を染めるゴーディを指差し笑うヴァルトを見て、アンジエリカも嗜虐心が擲られたのだろう。笑いを我慢出来ず、肩を震わせながらもヴァルトの言葉に調子を合わせた。

そんな二人の様子を見て、興味が沸いたのか——それまでの間、恐怖に身を震わせていたマリエラとソフィア姉妹もアンジエリカの背後からそつと顔を出し、ゴーディの顔をまじまじと眺める。

「……本当だ、タコみたい」

「たこー！ たこー！」

「ぐあああつ！ やめろおお！」

子供ながらの残酷な言葉が、容赦無くゴーディの心に突き刺さる。茹で上がった頭は頂点まで赤を通り越し……ドス赤く染め上げて、肩をわなわなと震わせている。

勿論、可笑しさでは無い。怒りが臨界点を超えているのは、傍から見ても明らかだった。

「ゆゆゆ……許さんぞっ！」

「ほう……？ どう許さんと言うんだ」

怒りによってゴーディの巨体から溢れ出す怒気と殺気ですらさして気にせず、ヴァルトは一層からかった口調で問い掛ける。

問い掛けに答えたのは、言葉では無く——宙を切る音と共に向けられた鉄球の洗礼だった。

その鉄球は黒々と光っており……ヴァルトが腕を回し、一抱えするのがやっとかと思える程の大きさであった。鉄球には太い鎖が付けられており、伸び切ったその先端をゴーディの手が握っている。

初撃で仕留め損なつた事に対するゴーディの舌打ちも耳に入るが、ヴァルトは無言で床へと視線を移した。そこには、無残な姿を晒しているテーブルと椅子だった物が転がっている。荒くれ者も多く訪れる娼館だけあって、堅いキサの樹で頑丈に作られていたものだろう。だがそれらは、今では粉々に粉碎されていた。

「……やってくれる」

一気に膨れあがつた攻撃の気配を察して、ヴァルトは咄嗟に床を蹴り、椅子を飛び越える形で後方へと飛び退いたのだが……どうやらそれは正解だったようだ。

何の材質で出来ているかは解らないが、ただの鉄で出来た鉄球程度ならば頑丈な家具がここまで粉々になるとは思えない。いくらヴァルトが頑丈だとしても、不意打ちでこんなものを喰らえば無事で済む筈が無かった。

「よくぞ、座つた状態からアレを躲せたものだ！」

「お前……馬鹿だろう。こんな狭いところで、そんなにデカい物を振り回せるとも思っているのか？」

「ふん！ この鉄球は俺様の手と同じよ！ どんな場所であろうとも振り回せぬ場所があるものかッ！」

言うが早い——、ゴーディは相当な重さがあるだろう鉄球を一気に自分へと引き寄せると、器用にもそれを小さな円運動だけで振り回し始めた。

大きな鉄球がゴーディの周りで回転し、空を切る不気味な音だけが食堂に響く。

「へえ……器用なもんだ」

「俺様の鉄球は自由自在ッ！ 幾ら障害物が多い室内とはいえ、安

心せぬ事だな！」

ゴーディの周囲を羽虫が如く纏わり付き、振り回される鉄球はその勢いをどんどん増してゆく。ついには常人の目には映らない速度となった時に、一際大きな音を立てるとその硬く重い鉄球が放たれた。

一抱えもある巨大な鉄球は暴力的なまでの勢いで、空気を押し付けヴァルトへと押し寄せる。遠心力も相成り、破壊的な勢いを保ち迫ってくる鉄球は見た目よりも大きく感じ、ヴァルトの距離感を狂わせた。

しかし、そこは幾度の死線をくぐり抜けてきたヴァルトである。身体へと当たる寸前に片足を横に素早く踏み出し、その攻撃を躲す。そのまま重心を前方へと傾け、ゴーディとの間合いを詰めようとした次の瞬間だった。

背後で何かが衝突する鈍い音がした直後、ヴァルトの首筋にチリチリとした嫌な感触が走る。本能が告げている警告に従い、ゴーディへと間合いを詰めていた身体を咄嗟に横へと倒すようにして無理矢理床を転がった。

「……ッ！？」

倒れる様に床へと這いつくばったヴァルトの上を、黒い物体が音を立てて通り過ぎる。その勢いは振るわれた時と全く変わらず……ヴァルトの上を通り過ぎた鉄球は、またもやゴーディの手元へと収まり周囲に不気味な音を撒き散らした。

——「こいつは、一体……」

これまで数多の手練れや魔物達と戦ってきたヴァルトも、初めて

味わった違和感を前に思わず眼を細める。どうも腑に落ちず、振られた鉄球がぶつかったであろう場所を確認するも……木製の壁は微かにヒビが入っているだけで、不思議な事に砕けていなかった。

あれほど大きな鉄球が全力で振るわれたのだ。鉄球に掛かる力は必ず何かに当たらなければ、勢いは止まらないだろう。

油断無く起き上がる寸前に、ヴァルトは床にも視線を走らせる。壁ではなく床へと落ち、鉄球の勢いが殺されたところをゴーディが素早く引き寄せた可能性を考慮しての事だった。だが、床に鉄球が落ちた形跡は何処にも見当たらない。

ヴァルトが感じた違和感の原因は、もう一つあった。

ゴーディの初撃を受けたテーブルと椅子の砕け散った姿、そして先程見た壁のヒビが脳裏を掠め、ヴァルトの思考に疑問として引く掛かりを覚えている。

それぞれ二つの事柄が、一つの武器から繰り成されたものとして成り立たない事柄であった。だが事実、その成り立たない事柄が目の前で起きている。

つまり——ゴーディと呼ばれる目の前にいる男は、家具をも粉碎する鉄球を操れるという事だ。さらには、勢いを付けた二撃目は壁にヒビを入れる程度に抑える事も出来る。

それは……勢いを失った鉄球が床へと落下する直前で、あり得ない力で自分の手元へと引き寄せた事になる。

とてもではないが、人間程度の力では出来る芸当では無かった。力に関しては絶対ともいえる自信を持つヴァルトですら、同じ事をしと言われたら即座に首を横に振るだろう。

鉄球を振るい、その勢いを殺すまでなら出来る。

……だが、振り回された勢いと同様の勢いを保ったまま手元へと

引き戻す術など無い。

「おい、カビ蛸頭……てめえ、どんな手品を使っただんだ？」

「クククツ……さあてな？」

「ヴァルト、気をつけて！ その鉄球は変よ。壁に当たって跳ねた様に見えたわ！」

「跳ねるって……鉄球がか！？」

アンジェリカの声にヴァルトは思わず、そちらへと視線を向ける。だが自分に忠告を発してくれるアンジェリカの姿が見える前に、視界の端で鉄球を振るうゴーディが映った。

「余所見は頂けねえな？ なあ、拳帝よお！」

声と同時に上段から振り下ろされた鉄球は、再び凄まじい勢いでヴァルトを地面へと叩き潰そうと飛来する。しかし、最初からその軌跡を読んでいたヴァルトにとっては、幾ら常人の目に止まらぬ速度の鉄球とて、躲す事はたやすい。

「……当たるかよッ！」

その場から大きく一歩だけ、後に跳ぶだけで悠々と鉄球を躲した——筈であった。

空しく地面へと突き刺さる筈の鉄球は、勢いもそのままにヴァルトの腹へと直撃する。

またもや首筋に嫌な予感が走るも、余りにも遅過ぎた警鐘を遥かに凌駕する痛みがヴァルトを襲った。

「ぐがつ……！」

「ひやははっ！ 殺ったあ！」

予想もしていなかった上、着地した直後で無防備だったヴァルトの腹を硬い鉄球が突き上げた。鉄球はそのままヴァルトの巨体をも易々と持ち上げて、食堂の壁へと叩き付けられる。

——あの鉄球、あいつは……！？

ヴァルトは鉄球が自分に届く前に確かに見た光景を、薄れてゆく意識の中で思い返す。

地面へと激突した硬いはずの鉄球がグニヤリと形を変えて、確かにアンジェリカの言った通り地面から跳ねていた。

聞いた限りでは信じられぬ出来事だったが、見えたものは紛れもなく事実である。……それはまるで子供が遊ぶ、荒糸で作った球の如く軽快に跳ねたのだ。

常識から逸脱した鉄球の不可思議な動きの原因を探る前に、新たな衝撃と激痛がヴァルトに襲い掛かった。失い掛けた意識が衝撃と痛みの為、再び強引にヴァルトを現実へと引き戻す。

断熱のために作られた木の壁を突き破り、その外側にある本来の石壁までめり込ませられたのだが、そんな事など分かる筈も無い。ただ喉からは声にもならない空気が胃から漏れ、先程平らげたものが込み上がってくる不快感も同時にヴァルトへと襲い掛かった。

痛みと不快感を押し殺して立ち上がるうにも、どういっわけかヴァルトの身体は全く動かなかった。何度か動かそうと試みるも、頭を強く打ち付けられた所為で身体が命令を受け付けない。他にも、直撃を受けた瞬間に肋骨が数本折れたのか……激しく咳込もうとする度に生暖かい、闘技場に居た間散々味わった鉄の味がヴァルトの口を蹂躪した。

ヴァルトは視界を確保しようと、埃と痛みで滲んだ鳶色の眼を何度か瞬きさせる。

だが……その視力が回復する前に、視界が黒い“何か”で一面を覆われた。

「これで……終わりにしてやるぜえええ！」

ヴァルトの視界を覆ったもの――、それはゴーディが再度振り下ろした鉄球であるという事にヴァルトが気付いたのは……耳鳴りが収まらない聴覚が辛うじて聞き取った、下卑たゴーディの叫びを聞いてからのことだった。

(1・5) 悲涙を生み出す拳

鉄球の一撃を食らったヴァルトを、壁へと叩き付けた後――。

ゴーディはすぐさま壁へとめり込んだ鉄球を引き寄せ、悠長に勢いをつける事無く再びそれを勢い良く振り下ろした。

砕け散った木材と埃が舞う壁穴に、再び大きな鉄球が吸い込まれてゆく。

鉄球が繰り成す鈍い衝撃は、二階建ての娼館そのものを揺るがした。

その振動が収まる前に再度、衝撃が走る。

娼館を破壊するかの如く、ゴーディは鉄球を振るい続ける。

誰も何も……言葉を告げる事が出来ないまま繰り返された凶暴な破壊行為は、十を数えた頃にようやく終わりを迎えた。

ゴーディは手元に引き寄せた鉄球を地面へと降ろした後、荒い息を吐く。

鉄球の大きさだけならば恐怖で身を寄せ合う姉妹の姉――マリエラ程度だが、その重さは呆然と壁の穴を凝視したまま固まっているアンジェリカの体重をも遙かに凌駕する。そんなものを先程までずっと振り回し続けていたのだから、呼吸が酷く乱れるのも当然だった。

肩で大きく息をしながらも、ゴーディは娼館の壁に開いた大穴から視線を外さない。

追撃に追撃を重ねた甲斐があったのか、壁の大穴からはヴァルトの気配が完全に消えていた。

あれほどにまで強烈な、まるで砲弾と見紛うばかりの攻撃を幾度も喰らったのだ。さしもの拳帝といえども、今では息も絶え単なる肉の塊になっている事は想像に難くない。

「……………」

息を整えながらも、ゴーディは無言で内心から湧き上がる快哉に酔い浸る。

あの無敵無敗と恐れられ、“不死者”や“拳帝”と呼ばれた男を今まさに自らの力で殺したのだ。これから自分が歩くだろう栄光の道程を思い浮かべるだけで、顔がにやける事など我慢できる筈も無かった。

「へ……へっへへへっ！」

「……ゴーディ……あんた……っ！」

いち早く我へと返ったアンジェリカは、殺気にも似た怒気をゴーディへと放つ。しかし、当のゴーディは禿げた頭を満足気に一撫でして、にやける面を隠そうともしない。

「おうおう、怒ってるのかアンジエ？ 獲物はこの“鉄球のゴーディ様”が頂いちまって悪かったなあ！ まっ、壊しちまった壁はきちんと弁償してやるから安心……」

だが、ゴーディの言葉は続かない。

今しがた浮かべていた笑みも次の瞬間には凍り付き、真っ赤になるほど血の巡りが良かった頭からは血の気が一気に失せる。“茹で蛸”と嘲笑われていたその顔は一瞬で氷蛸へと変化した。

「な……なっ……！？」

アンジェリカもゴードイ同様——声は抑えるも全身から血の気が失せ、突然膝が震えだす。

唐突にゴードイが開けた穴の奥から溢れ出した濃密な気配が、百戦錬磨の賞金稼ぎと一流の暗殺者をも恐れさせた。

それは殺気でも無く。

怒気でも無く。

ましてや……闘気でも無い。

——だが、それらの“全て”を含んだ気配だった。

云うならば——“歓喜”

それは、狂おしいまでの喜び。

狂喜、とでも云うべきものが漂っていた。

戦いの場にある事自体、似つかわしく無い喜び。

逆に……戦いの場であるからこそ、ぴったりと納まる狂気である。

その混沌とした気配が『見える』と錯覚できる程に濃密さを漂わせ、穴の中から霧の様に溢れ出す。食堂とその場にいる者は、混沌に犯され誰も言葉を発する事など出来なかった。

「……あ、……ああ。フオ……イ………全、く……」

未だに埃が舞う穴の中から、くぐもった低い声が聞こえる。

乱暴に破壊された――木の繊維が剥き出しとなり、ささくれだっている穴の縁を大きく無骨な手が掴む。皮膚に木が刺さり、手から血が滴り落ちた。

だが傷付く事すら構わず身体を起こし、姿を現したのは――“拳帝”と呼ばれ“不死者”とも呼ばれ、闘技場で畏怖された者ではない。

それは、世間で呼ばれた名からは余りにも掛け離れた……男の姿だった。

「楽しいなあ……ああ、全く楽しい！　なあ、そうだろう？　フオルトナ？　ルシイ？　こんなに楽しいのは……そうだ。花刻の祭で、湖へ遠出に行った時以来だ……」

「ヴァル……ト？」

「なんだ？　……アンジエ、俺は今楽しいんだ。邪魔しないでくれ」

震える声でアンジエリカが無意識の問いかけに対し、これまでヴァルトと呼ばれていた男は軽く一瞥しただけだった。

口調とは裏腹にヴァルトの細い瞳に濃く漂う、憂いの色に気付いたアンジエリカが再び口を開くも――興味が無いとばかりに視界から姿を追いつかれ、喉元まで出掛かった言葉を嚥む。

アンジエリカは大きく二度三度と瞬きを繰り返し、穴から這い出てきたヴァルトを見つめる。なおも押さえようのない震えと奥歯が恐怖で鳴っていたが、それすらも忘れて凝視を続けた。

穴から這い出てきた男は、昨夜ベッドで幾度も肌を重ねたヴァルトに間違い無い。

断言も出来る。

だが——暗殺者と娼婦の二つの勘が違ふモノだと訴えかけてくる。そして、先程から“逃げる！”と本能に警鐘を鳴らし続けていた。

アンジェリカは、まるで底の見えない井戸の闇を覗いてるかの様な錯覚を受ける。

“あれ”は恐らく、本来ならば人間風情が直視してはいけないモノだ。深淵とも、闇にも感じられる気配に引き摺り込まれては……二度と陽の当たる場所へと戻れないかもしれない。

「——つくつそおおおおお！」

突如、雄叫びと共に鎖が伸びる鈍い音がアンジェリカの耳へと届く。見るとゴードイが体の震えを押さえて、絶叫に似た叫びを挙げながらも鉄球を振り回し始めていた。

アンジェリカはなおも定まらぬ思考で、ゴードイを内心賞賛する。これほどにまで異質な気配を感じて、まともに行動……しかも、敵対行動をとれる者などそうはいない。もしいるとするのなら、超一流の戦士か……もしくは底が抜けた大馬鹿者ぐらいだ。

アンジェリカが感心したのも一瞬だけ、ゴードイが後者だということとはすぐに知れた。

鉄球を振り回すゴードイの瞳からは、正気の色が全く伺えない。

——恐怖に心が飲み込まれてる……

アンジェリカが抱いた思いを裏付けるかの如く、ゴードイが振り

回す鉄球にも怯えが表れ、先程まで流れるような鉄球捌きの色彩がなくなっている。今のゴーディの鉄球を見る限り、力任せにただ振り回しているだけなのは明白だった。

「フォルトナ、ルシイ……大丈夫だよ。心配しなくていい。もうすぐだ……もうすぐ、きっと……」

「なん……何だよ！ 何だ！？ お前は……！ 一体何なんだよおお！」

完全に穴から姿を現したヴァルトの姿は、思わず眼を背けたくなる程に凄惨なものだった。着ていた服は擦り切れ、上半身は殆どの箇所から肌が露出している。さらに至る所からは血が流れ出ており、立っているのが信じられない程だった。

だが、問題はそこでは無い。

アンジェリカやゴーディのしている目の前で、身体中に刻まれたヴァルトの傷がはつきりと塞がってゆく様子が、何よりの“異常”だった。

その目の前で行われている異常な光景が、ゴーディの恐怖感をさらに加速させる。

「なあ、お前……もつと強いんだろう？ もつと隠した力があるんだろ？ それを見せてくれよ、俺を殺せる力を……この、忌まわしい生を終わらせる力を……」

ゆっくりと……一歩ずつ床の感触を確かめる様に、ヴァルトはゴーディへと歩み寄る。顔は満面の笑みを形作り、両手も相手のすべを抱き留めようとするかの如く大きく広げていた。

最初はヴァルトが錯乱しているのかとアンジェリカは疑っていたが、先程こちらを見て名をしつかりと呼んだ時点でその可能性は否

定されている。

意識がしつかりとしているからこそ、今ゴードイへと歩み寄っているヴァルトの存在は狂気染みた恐ろしさが秘められていた。

折れてあらぬ方向へと曲がっていた指は戻り、血が流れ出ていた傷口も既に塞がっている。

アンジェリカはその光景を、呆然と眺める他無い。まるで夢を――それも、とびきりの悪夢を見ているかの様な気持ちに包まれた。

「ノ…… “ノスフェラトゥ”」

脳裏にふとある名前が思い出され、アンジェリカは知らず知らずのうちに口ずさむ。

それは、誇張されて伝わったとばかりに思い込んでいた――目の前に立つ、常識から逸脱した存在に授けられた名であった。

ゴードイの精神が持ったのは、後退りを続け……丁度最初にヴァルトと対峙した時の距離を保った時だった。

恐怖心からずっと振り回していた鉄球を、遂にヴァルトに向かつて投げ放つ。それは攻撃と呼べるほどのものではない。恐怖の対象を自分から遠ざけるためだけの行動であり、力任せに投げられた鉄球は、ただ力自慢の素人が投げ放った様に勢いがなかった。

だがゴードイも、一流と呼ばれているだけあり体が覚えていたのだろう。放たれた鉄球は狙い変わらずヴァルトに向かって飛んでゆく。先程直投の軌道を見切っていたヴァルトを前に、単に投げただけという直線的な攻撃が当たる訳も無い。アンジェリカはそう判断していたのだが……一方のヴァルトは避ける素振りすら見せず、その場に立ち尽くしていた。

アンジェリカの後ろへと隠れ、震えていたマリエラとソフィアが

小さく悲鳴を上げてアンジェリカの服を一層強く掴む。今は幼い姉妹達の身を第一に考えるべきなのだが、アンジェリカ自身も未だ身体に力が入らない。

この後起こるであろう惨事に対して、アンジェリカは懸命に瞳を閉じようとする。だが黒い大きな瞳はそれを拒否し、まるで魅入られたかの様に目の前で展開される光景から眼を離す事が出来なかった。

「こ、今度こそ……」

いくら力任せに投げただけとはいえ、大の大人以上の重量を持つ鉄の塊である。当たれば確実に先程同様、この薄気味悪い相手を壁まで吹き飛ばせるだろう。

ゴーディの醜い顔が、ようやく覚えた安堵に歪む。

だがそれは、ほんの一瞬にしか過ぎなかった。

「……何だ、これは？」

鉄球がヴァルトに襲い掛かり、再び壁際へと叩きつけられる音はいつまで経ってもアンジェリカの耳には入ってこない。代わりに聞こえてきたのは、ゴーディが恐怖の余り引きつらせて出す呼吸音と、静かに問い掛けるヴァルトの声だけだった。

「こんなものじゃないだろう？ さっきの勢いはどうした。骨を砕き肉を潰す……あの鉄球の破壊力はどこにいったんだ……？」

ゴーディに問いかけるヴァルトの声色には、心底不思議に思っている色があった。それと同時に、ただ無邪気に質問しているだけに聞こえる。

しかし——、その無邪気な声色とはほど遠い姿は、見ている者に戦慄を与えた。

「……鉄球の中に刻印を仕込んだ刻印魔具で自在に硬度を操っていたのか、成る程。だが、こんなものじゃないんだろ？」

鉄球は当たる寸前で、ヴァルトが挙げた手によって止められていたのだ。それも片手のみで、一步も下がること無く止められている。「どうした？ ほら、その程度じゃ……俺は死なないぞ？」

もう一度問い掛けるヴァルトの声色。そして、自分が絶対の自信を持っていた鉄球をいとも簡単に片手で止められている光景を前に——「ゴードイに残されていたなけなしの理性が、今度こそ完全に吹き飛んだ。」

「う……うあ……あああ。うわあああああつ！ 化け物。この化け物おつっ！」

半狂乱になりながらも、ゴードイは鉄球を戻そうと繋がっている鎖を力の限りに引っ張る。だが鎖は、引っ張られる度に鈍くジャラリと金属の音を響かせるだけだった。いくらゴードイが力任せに引こうとも、鉄球はヴァルトの手に吸い付いて離れない。

否——吸い付いている様に見えるが、実際は違った。

「どうして……そんな……」

アンジェリカはその目で見ている光景が現実とは思えず、ただ驚きのばかり目を見開く。

ヴァルトは鉄球を片手で防いでいた訳では無い。先程大柄なヴァルトをも容易く吹き飛ばした凶悪な塊を片手で“掴んで”止めていたのだ。黒い鉄球に指を食い込ませ、言葉通り“掴んで”いた。

「まさか、この程度なのか？ お前も弱いのか？ お前も俺を……」

殺してくれないの、か？」

いくら引こうが寸分も動かぬ鉄球と、鉄が上げる軋みの振動が鎖を通じてゴードイへと伝わる。

この時、ゴードイにほんの僅かでも理性が残っていたのならば、直ちに鎖を離して“逃げる”という選択肢を迷わず取れていただろう。だが、恐怖によって完全に凍結された思考は……最も安易であり、最も最悪な選択を取ってしまった。

「ほら、早く……もつと楽しませてくれないか？ でないと、フォルトナとルシイが……また、消えちまう……」

「ひいひい……離せっ！？ いいから離しやがれっ！ こっ、この化け物っ！ 死ねシネシネ！ 死ぬええええっ！」

震える手へとより一層力を込め、恐怖で白くなった唇から短い言葉を呟きながら、ゴードイは鎖の持ち手に刻まれている刻印を撫でる。それが魔具を発動をさせようとしている事にアンジェリカが気付いた時には、鎖から鉄球へ紫電が走っていた。突如走った雷は、容赦無く鉄球を掴むヴァルトの身体へと襲いかかる。

紫電は青白い火花を散らしながら、ヴァルトの肉を焼き身体の芯である骨を焦がした。当然、ヴァルトが味わっている痛みは普通の人間ならば、一瞬の悲鳴の後に衝撃で息絶える程のものだ。

但し、“普通の人間”ならばの話である。

食堂内に食肉を焼く香ばしさとは異なる、人の肉が焦げる不快な臭いが立ち込めた。

「へ……へへっへへへえへへへ……っ！ ひいあ！ ひいひいひい……」

……」

誰もが、臭いと人が目前で焦げてゆく異様な光景に啞然と言葉を失う中。ジャリ……と、床を擦る音だけが鳴り響く。それは今も紫電を大きな身体に纏わり付け、至る所から煙りとも水蒸気とも分らない揺らぎを立ち上らせている男の方から聞こえてきた。

ゴーディの目には信じられないものが映り、今度こそ絶句する。有り得ない。それは、決して有ってはならない事だ。

今まさに、ゴーディの抱く“常識”という常識全てが、根本から音を立てて崩れ去っていった瞬間だった。

今ゴーディが魔具であつた鎖を通じ放つた雷は、成人男性よりも数倍の身長を持つトロールですら絶命させる事が出来るのだ。人間ならば骨の髄まで焦がし、殺せるだけの力がある筈だった。

しかし、目の前の男は——“拳帝”と呼ばれた元奴隷闘士は……その雷を闘気のように纏い、何事も無いかのような素振りで一歩ずつゴーディへと歩み寄っていた。

ヴァルトが一步進む度に、床に黒い足跡が焦げ残る。それは……死神の足跡を彷彿させる程、黒く禍々しく感じられた。

「これが、お前の力なのか？　こんなものが……？」

「っ……！　ひぐうっ！」

ゴーディは身体が恐怖で硬直し、指一本満足に動かす事も出来無い。既にゴーディの数歩前にまで歩み寄ってきていた男の雰囲気と言葉と共に一変し、死への恐怖がより身近へと迫る。

得体の知れない気配は掻き消え、代わりに怒気が——触れるだけで殺されてしまうかの様な殺気へと変わっていた。

——殺されるッ……！

ゴーディがそう思った時には、ヴァルトはもう手の届く所まで近付いていた。

「……もう、いい。もう……ルシイもフォルトナも“消え”ちまったよ……。お前じゃ無理だったんだ……。だから、お前もこの世から死んで消えろ……」

諦め、蔑み、失望。

それらの感情が全て混ざった瞳で、ヴァルトは目の前で震える男へと向かって空いている方の腕を伸ばす。ゆつくりとゴーディの禿げた頭を、血が残るも今では傷が完全に癒えた手でヴァルトは掴んだ。

未だ魔具から流れヴァルトの身体を走っていた紫電が、腕を通じてゴーディの顔へと流れ込む。

「……アワヴユツ！」

ゴーディが短く悲鳴を上げると、手から鎖が落ちた。魔具から魔力が途切れ、ヴァルトが握ったままの鉄球は雷を発する事無く単なる鉄の塊へと戻る。だが、ヴァルトは構わず指に力を込め続けた。鉄球にすら穴を開ける力で、ギリギリとゴーディの頭を締め上げていった。

「あが……あがつ……」

無言で口端を上げ犬歯を見せた笑顔を浮かべているものの、ヴァルトの眼は正反対の色を浮かべたままだ。それでも、命の灯火を握り潰すのを楽しむかのようにゆつくり……ゆつくりとゴーディの頭を締め上げる。

ヴァルトの指に力が籠る度、小さい悲鳴と骨の軋む音が食堂内に木霊した。

「ヴァルト！……駄目っ！」

その時——我に返ったアンジェリカが声を張り上げ、咄嗟に静止の言葉を叫ぶ。

舌打ち混じりにヴァルトはつまらなそうな表情を浮かべ、そちらを一瞥する。その目に映ったのは美しい顔を蒼白に染めたアンジェリカと、妹を庇うように抱き締めたまま黙ってヴァルトを見据える姉のマリエラの姿だった。

「……邪魔するなよ、アンジェ。お前だって人の命を——」
吐き捨てる様に言い放つも……唐突に頭の奥が鈍い痛みを訴え、ヴァルトは言葉を止めた。

『俺にはな……俺には待つてる娘達がいるんだッ！　なのに、こんな所で……こんな所で……っ！』

過去に聞いたある男の声が頭の奥に響き、ヴァルトは半ば無意識に握んだ頭を握る力を緩めていた。

——畜生っ！　こんな時に、何なんだ……

苦々しく頭の中で木霊する声に悪態を吐くと、ゴーディをその手から解放してやる。ヴァルトの手から離れたゴーディは声をあげる事無く、その巨体を倒れ込ませた。

絶命した可能性も示唆して、アンジェリカがその巨体の胸元を注視する。幸いにもゴーディはただ気絶しているだけの様で、口からは泡を吹いているが呼吸は安定していた。

一方のヴァルトは深く溜息を吐くと、視界の端でアンジェリカと抱き合う姉妹へと目を向けた。先程まで身体を支配していた震えをようやく制御したアンジェリカと目が合う。震えこそ今では止まっているものの、黒く大きなアンジェリカの瞳に明らかな怯えの色が窺えた。

アンジェリカと姉妹の様子を見た後、ヴァルトは小さく自嘲の笑みを浮かべる。

ヴァルトはもう興味は無いとばかりにゴーディの体を跨ぎ、部屋の隅に置いておいた自分の装備一式が入った背負い袋を手についた。無言で背負い袋に入った装備の音だけを鳴らし、食堂の出口へ向かって歩みを進める。

「世話になった……もう二度と会う事も無いだろう」

「あ……ちよっ！」

大通りに面する扉の前で立ち止まり、ヴァルトは振り返らずにたった一言だけ呟く。状況に思考が追いつかないも、制止の言葉を告げるアンジェリカを無視して扉へと手を掛けた。

その時、ヴァルトの身体に軽い……本当に軽い、衝撃が走る。

小さな気配がこちらへと向かって来ていた事は、ヴァルトも気付いていた。だが、敵意の無い薄い気配を避ける必要は無いと思いそのまま放っておいただけだ。

「マリエラちゃんっ！」

「……何だ、チビ」

ヴァルトは怒る素振りも見せず、感情を殺した瞳を腰の辺りへと降ろす。破れて形を殆ど残していない服の腰辺りに小さな手が添え

られて、小柄な人物——マリエラがしっかりと掴んでいた。先程の軽い衝撃は、出て行こうとするヴァルトを慌てて止めようとマリエラが体当たりした結果だった。

裾を掴むマリエラが浮かべる表情を見て、ヴァルトは思わず足を止める。

マリエラは震えながらも口を真一文字に結び、蒼い双眸には力強い輝きが見えた。揺るがない強い意志を宿した瞳のまま、マリエラは自分より遥かに大きなヴァルトを見上げて叫ぶ。

「……お父さんっ！」

「……えっ！？ ヴァルト貴方……」

マリエラの放った一言に、アンジェリカは思わず動揺の声をあげる。だが、当のヴァルトは至って冷めた目でマリエラを見つめるだけだった。

「あの……おじさん、闘技場に……いたんですよ？ その人が言ってたから……あの、お父さんを……グランと言う人を知りませんか……？」

ゴーディが現れるまでは大声を放ってヴァルトと料理を取り合っていたマリエラだったが、先程の光景を見て恐る恐る言葉を選んで尋ねている様子が伺える。手こそしつかりとヴァルトの服を掴んでいるが、その足は未だ恐怖の為か僅かに震えていた。

「……名を言われても分からん。何か特徴はねえのか？」

冷めた視線を送ったまま、それでも話を聞く気になったヴァルトに対してマリエラは必至に首を捻りながら言葉を選ぶ。

「えっと……えっと、あ！ お父さん、首の所に大きな傷があつて……それと、指が一本無いんです！ 知りませんか？ 何でもいいんです、知ってたら教えてくださいいっ！」

「……首に傷、指が無い……か」

ヴァルトは訝しげに呟くも、少女から聞いた特徴に当てはまる男を思い出す素振りは見せない。必至に特徴を挙げるマリエラからの言葉を聞いた瞬間には、既に頭の中で一人の男が浮かび上がっている。

それは不可思議な事に……今しがた頭の中で響いていた、声の主と完全に特長が一致していた。

マリエラの顔を見下ろしながらも、ヴァルトは過去に出会った男と交わした会話を思い出す。

『お前……奴隷しては目が生きてやがるな？ 面白え……』

『俺は奴隷じゃ無い！ 金が……どうしても金がいるんだ！』

『成る程。金に目が眩んだ“志願闘士”……か』

『うるさい！ 家族を守るためには……未来を勝ち取るためには金がいるんだ！』

『……どうした？ もう終わりか？ ……“未来を勝ち取る”んじやなかったのか？』

『俺にはな……俺には待つてる娘達がいるんだッ！ なのに、こんな所で……こんな所で……っ！』

鮮明に思い起こされるのは、会話だけでは無い。

自ら振るった拳と、男の命を終わらせた瞬間の感触まで——全て

の事柄が鮮明に記憶として蘇り、ヴァルトの五感を刺激した。

——この娘達は……あの男を待っていたんだな。そしてあの男も、この娘達を守る為に……成る程な……これが、俺の罪に対する罰なのか……

マリエラが必至に見上げる中、ヴァルトは一度だけ瞼を閉じる。一つ大きな溜息を吐いた後、変わらぬ表情でマリエラを見つめ直した。

「知っている……」

「ほん……とう、ですか……？」

「……ああ」

驚きと喜びに眼を見開くマリエラを無表情で見つめながら、ヴァルトは自然と重くなる口で現実を述べる。

「その男なら、俺が殺し……」

「マリエラちゃんっ!？」

自分でも知らぬ間に眼を細め、真実を述べようとしたヴァルトだったが……突然自分へと寄り掛かってくる少女の身体と、彼女の名を呼ぶアンジェリカの叫びによって言葉が遮られた。

咄嗟にヴァルトは手を伸ばし、小さな体が崩れ落ちない様に受け止める。アンジェリカが駆け寄り、白くなった顔色を伺う間もヴァルトはその光景をぼんやりと眺めているだけだった。

気を失っているだけだと分かり、アンジェリカが安堵の息を吐く様子もヴァルトは眼に入らない。その視線は呆然と、ヴァルトの服の裾を掴み決して離そうとしないマリエラの小さな手だけを見つめ

続ける事しか出来無かった。

氣を失っても、しっかりと服を握っているマリエラの小さな手。
それはまるで――離してしまつと最後、父との繋がりが切れてしまつのでは無いかとばかりに強く、強く握られたままだった。

(1 - 6) 目的定まらぬ拳

先の出来事から結局——氣を失ったマリエラがヴァルトにしがみついたまま、離れる事は無かった。さらには妹のソフィアも先程ゴ—ディと対峙していた時に漂っていたヴァルトの尋常成らぬ氣配に当てられて、いつの間にか氣を失い床へ横たえられていた。

その所為で出て行く氣が削がれたヴァルトは、アンジェリカに指示されるがまま渋々マリエラを抱きかかえて、二階にある宿の一室へと連れて行かれる羽目となったのだが……

——パンッ！

姉妹を一つのベッドへ寝かせた直後。

ヴァルトが溜息を吐く間も無く、アンジェリカから平手打ちが飛んできた。

突然軽い音と共にヴァルトの頬に衝撃が走り、アンジェリカの手で容赦無く打たれた頬が赤く染まる。

躲すのも億劫でされるがままに打たれたヴァルトは、その事に対しては何の感慨も浮かばない。ただ、“何故自分が打たれたのか”という疑問だけがヴァルトの頭に浮かんでいた。

「……何故か、聞いてもいいいか？」

「ヴァルト……貴方、さつきマリエラちゃんに何を言おうとしていたの……？」

昨夜行われたばかりの情事が嘘の様に、アンジェリカの視線は冷たい。黒い大きな瞳は怒りの余り細められ、まるでヴァルトを蔑んでいるかのようだった。

ヴァルトは小さく息を吐くと、アンジェリカが想像していた通りの言葉を告げる。

「こいつらの親父は……俺が殺した。それを言おうとただけだが」「やっぱり……ねえ、一体どういふつもりでそれを言おうとしたか聞いてもいいかしら？」

「“どういふつもり”もあるか、事実を言うに理由などいるのか？」「——ッ！ ヴァルト、貴方……その“事実”を言う時に、一瞬でもこの子達の事を考えた？」

アンジェリカはヴァルトが平然と告げたあまりの言い草に、思わず声を荒げそうになる。だが、すぐ脇のベッドで寝息を立てている二人を起こさぬように息を吐いて心を落ち着かせた。

「……この子達の、唯一のお父さんのよ？」

「だったら何だっていうんだ？ 俺が殺したのは事実だ。俺がこいつらの親父を殺した。……それとも何か？ お前は殺した俺が悪いとでも言うのか？ このガキ達から父親を奪った俺が悪いのか？」

「ちよつと、何も私はそんな事言つて……」

「お前が言っているのはそういう事だ！ 闘技場に上がればそこは殺し合いの場だ。こいつらの親父は自ら望んでそこに上がり、結果負けた。そして死んだ。弱かったから死んだ！ 生きるか死ぬかしは選択の無い馬鹿げた場所に立ったから……俺に殺される羽目にな

「つたんだよ！」

なるべく小声を心掛けるアンジェリカとは対照的に、ヴァルトは徐々に声を荒げ感情任せに言葉を吐く。胸の内に抱いていた感情を声に出して紡いでゆくうちに先程の鈍痛がまた蘇るが、今度は関係無いとばかりに捲し立てた。

「……………うつん……………」

声を抑えず早口で喋るヴァルトを慌ててアンジェリカが制止した時だった。

ベッドに寝ていたマリエルの中から小さな呻きが漏れ、僅かに寝返りを打つ。その声が耳に入った時には自然と、アンジェリカとヴァルトはベッドに視線を向けていた。

ベッド脇で行われた言い争いで目覚めるかと思ったマリエルだったが、幸いにも目覚める気配は見られない。二三言口を動かした後は心地よさそうな寝息へと戻り、再び深い眠りの底へと落ちていった。

目が覚めかけた不快感からか、少し眉を潜めた寝顔で眠るマリエルの頭をアンジェリカはそっと優しく撫でる。眠っていても頭を撫でられ、多少は安心したのだろう。マリエルの寝顔が安らかなものになったのを確認すると、ジェリカはドアへと歩み廊下へと足を踏み出した。

此处で話をしていたら、そのうち目を覚まさせてしまうに違いない。

何も言わず“場所を移そう”と視線のみで意図を伝えてきたアンジェリカに対し、ヴァルトも無言で廊下へと足を向けた。

廊下へと出てドアを閉める間際、僅かに見えた隙間からは姉妹仲

良く眠る姿を確認したアンジェリカは目を細める。

「あの子達はもう……二人っきりになっちゃったのね……」

寂しげにアンジェリカは呟くと音を立てない様にそつと扉を閉ざし、ヴァルトがいた方へと振り返る。てっきりそこにヴァルトの姿があるものだと思っていたのだが、下へと続く階段を降りる大きな背中が目に入りアンジェリカは目を見開いた。

「……ヴァルト！」

慌てて名を呼びながら後を追って階段を下りるも、ヴァルトは振り返る気配すら見せない。背負い袋を肩に掛けたヴァルトは大腿で半壊した食堂を通り過ぎ、アンジェリカの制止も聞かず外へと続く扉を押し開いていた。

「ちょ……ちょっと！ 話をするなら食堂で十分でしょう？」

「話？ なんの事だ？ 話す事は……もう無い」

ヴァルトは扉を押し開いたまま、振り返らずに答えた。あくまでも対話を拒否するその姿勢を前にアンジェリカは呆れ半分、憤慨半分に足音荒く外へ出ようとするヴァルトへと近付く。

「ヴァルト。貴方、さっきから少しおかしいわよ」

「……あのガキには“お前が”“好きに”言えればいい。優しい暗殺者様は、あいつらに偽りの希望を与えてやりたいんだろ？」

「私の事は別と言ってもらっても構わない。だけでも……相手はまだ、子供なのよ！？ 希望を持たせてあげて何が悪いって言うのよ！」

「いいか悪いかは、真実を知った時にあいつらが判断する事だ。違

うか？ ……それは兎も角、お前から話せばいいだろ？ お前は事実を既に知った、後の事は知らん……元々、ガキは好かねえんだ」

それだけを言い捨てるように吐くと、ヴァルトは開いた扉から外へ出ようとする。

幾ら制止しても聞かないヴァルトをアンジェリカは強引に押し止めようと手を伸ばすが、ごく自然な動作でアンジェリカの手をするりと躲して、ヴァルトは娼館から足を踏み出した。

腕を躲されたアンジェリカはヴァルトを呼び止めようと口を開く。だが、一瞬だけ後ろを振り返ったヴァルトと目が合い、その動きは完全に凍り付いた。

「ヴァルト、一体何が貴方を……そこまで意固地にさせているのよ？」

無然と手を伸ばしたままの姿勢で固まったアンジェリカは、呆然と呟く。

だが、答えなど到底返ってくる筈も無く——ただ立ち尽くしたまま、大通りの人混みに紛れてゆくヴァルトを見失うまで眺める事しか出来無かった。

ヴァルトは人通りの少ない中通りを、あても無く歩き続ける。

今歩いている特別地区は娼婦や男娼などを扱う店と、賭場が設け

られている下層地区である。他にも傭兵の様に余り品がいいとはいえない連中が集う酒場や店が多い為、まだ陽も高い今からでも店を開けている所の方が多い。それに伴って、大通り以外は必然的に道行く人の数も少なかった。

道のあちこちにある吐瀉物の残骸や汚物の所為で空気が淀み、一言では表現し難い臭いが鼻を不快にさせる。奴隷の時は日常的に嗅いでいた悪臭も、今のヴァルトにとっては不機嫌さがさらに増すばかりだ。

さらに――先程から、いくつもの気配や視線を感じていた。無論、好意的なものでは無い。いずれも、ヴァルトの隙を窺うような不快なものばかりである。

「……死ねやああ！」

突然、路地にいた男が洗練さの欠片も無い殺気と共に白刃を煌めかせて躍りかかって来る。ヴァルトはその男に一瞥もくれず……相手が振りかざした長剣を躲して、焦点の定まらない目をした顔面に無言で裏拳を食らわせた。

「……ゲブウツ！」

間拔けな声を出して地面へと倒れ込む男に視線を向ける事無く、ヴァルトは握った拳をさらに強く握り締める。

――畜生、苛々する……

通りにいる者達を怯えさせるヴァルトの舌打ちと眼光の鋭さは、何もこの場所が不快に感じるからだけでは無い。先程まで居た娼館でのやり取りが、いつまで経っても脳裏から離れなかったのだ。

『……この子達の、唯一のお父さんのよ?』
『俺にはな……俺には待つてる娘達がいるんだッッ! なのに、こんな所で……こんな所で……っ!』

頬を叩いた後で告げられたアンジェリカの言葉と、悲痛な表情。
さらには過去に戦った男の言葉が頭に反芻し、こびり付いてヴァルトの脳裏から離れない。

八つ当たりと解つていながらも、裏拳を食らい脳震盪を起こして倒れている男の襟首を掴んで持ち上げると、その男を路地の一つへと放り投げた。男が飛んでいった路地の奥から何かが潰れる音と別の短い悲鳴が聞こえ、ヴァルトを窺っていた気配が一つ消え失せる。

それでもヴァルトの気は少しも晴れず、それどころか逆に苛立ちが募るばかりだった。

——もういいだろう。もう……過ぎた事じゃねえか!

心の中で言い知れぬ不快感に毒付きながらも、もう少しで特別地区を抜けた大通りへと出る寸前だった。不意に、路地側からヴァルトに向かって声が掛けられた。

「……よお……ノスフェラトゥ。今日は……随分とご機嫌斜めじゃ……ないか」
「……あ?」

突然掛けられたくもり掠れた声に、ヴァルトは睨み付けながらそちらへと視線を向ける。決して敵意の無い言葉に対しても、陰悪

な態度を露にするが……汚物に塗れた路地裏の隅に見た事のある姿を捕らえ、ヴァルトは目を僅かに見開いた。

それが路地裏に転がる酔い潰れた人間や、厄介事に巻き込まれて物言わぬ冷たい肉塊になったモノならば見慣れたものだ。さして驚きもしないし、構う事も無い。

だが……そこで自分へと声を掛けた人物が、奴隷という身分から開放された日に、初めて美味しい物を食わせてくれた——気の良い串焼き屋の店主ならば話は別だ。

「あんたは……」

「……よお。お互い……一日会わないだけで……散々な、変わり様……だな」

路地裏で座って壁に背を預けながらも、弱々しくヴァルトに向かって手を挙げる串焼き屋の店主は決して酔い潰れていた訳では無い。その姿を見れば、彼の身に何があつたかは一目瞭然だった。

衣服は胸元から縦一直線に破れており、辛うじて服の体裁を保っていた。その服でさえも所々が血で滲み、破れた箇所から見える肌には何箇所も内出血で変色している。

暴行を受けてから結構な時間が経っているのか……顔は大きく腫れて内出血を起こしており、ヴァルトも声を聞かねば一瞬誰だか判断に迷った程であつた。

「おい、昨日の串焼き屋じゃねえか！ 一体、何があつた！？」

ヴァルトは慌てて駆け寄り、壁に背を預けているが今にも倒れこみそうな店主の不安定な身体を起こしてやる。

「……うつ、痛つつ！……はは……、無骨なのはいいが、こつちは怪我人なんだ。もう……少し、手加減してくれ……ぐっ……」

口に笑みを浮かべ、まだ軽口を叩くだけの余裕はある様にも見える。だが、その身体は予想よりも酷かった。ヴァルトは店主の身体を抱きかかえて初めて、片方の腕が折れ本来なら曲がらない方向を向いている事に気付いた。医術士に見せない限り断言はしかねるが……大凡の見立てですら、胸の骨も折れている事が分かり、生きている事が不思議な程である。

「……何があった？」

言葉に少しばかりの怒りを滲ませて、ヴァルトは静かに問い掛けた。

「へっへへ……。何、ちよつとした商売上の揉め事ってヤツさ。……それより悪いが、こうしてまた再会出来たのも何かのよしみって事で……家まで送ってもらえないか？ 昨日から帰って無いもんで……カカアが心配しちまうといけねえ……」

「分かった、案内してくれ」

ヴァルトは呻きながら半身を起こした店主に手を貸し、立ち上がらせる。幸いにも折れていたのは片方だけだったので、そちらの腕を抱えて歩き始めた。

互いに言葉を交わす事も無く。時折方向を指示する店主の言葉に頷く程度のやり取りで、二人は道をゆつくりと進んでゆく。

やがて、ゆつくりながらも街の中心に近い大通りに面した場所――店主が露店を出していた場所にまで到着した。

元が店であつたかの判別さえしかねる程に、露店も散々な状態になっていた。

店主と同様、無残に破壊された露店の前に、屈み込んで懸命に片付ける年配の女性の姿を捉えた店主が大声で女性の名を呼ぶ。

名を呼ばれた女性は驚いた様に顔を上げ、ヴァルトに肩を借りて歩く店主の元へ慌てて駆け寄る。女性がこちらへと来る様子を見て店主は顔を上げると「うちの力カアだ」と片眉を上げてヴァルトにしか聞こえない声で囁いた。

駆け寄って来た女性に対し、店主はなるべく明るい声で言葉を告げる。

「あつ！ あんたあ……！」

「よお……心配掛けてすまなかったなあ」

「心配つて……あんたっ！ 大丈夫なのかい!？」

「……ん？ へへっ……少し手酷くやられちまったが……まあ、何てこたあねえよ」

無事な事を表現しようとしたのか、店主はヴァルトの腕から離れると腕に力瘤を作る真似をする。だが当然ながら腕が半分も上から無いうちに、痛みで顔を顰めて呻いた。

「おいおい、あまり無理するな。あんた、腕だけじゃなく胸の骨も折れてんだぞ……」

心配して顔を覗き込む妻に店主の身体を預けた後、ヴァルトは屋台の様子を見渡し店主へと問い掛けた。

「しかし、あんただけじゃなく店までこの有様とは……一体、何があつたんだ？」

「……へへっ、こんな事はよくある事でさあ……」

「あんた！ いい加減にあいつらと事を構えるのはよくなって、この前言ったばかりじゃないか！ ……このままじゃ、いつか本気で死んじまうよ！」

「うるせえ！ こっちにだって商人の意地つてもんがあらあな！」

おめえは黙ってる」

「あいつら……？」

唐突に始まった夫婦喧嘩を眺めながらも、ヴァルトの脳裏に昨日出会った二人の男が蘇った。ヴァルトが屋台へと赴き、店主に言いがかりをつけていた二人組だ。顔は思い出せないが、彼等の言っていた言葉が頭の隅に引つ掛かりを覚える。

「なあ、オヤジ。聞いてもいいか？ “あいつら” って、昨日あんなの屋台で難癖つけていた奴等か？ 確か、アルギ何とか……一家とか言ってたが」

眉を顰めヴァルトが訝しげに問い掛けると、串焼き屋の店主は伏し目がちにも笑顔を浮かべて言葉を返した。

「ははっ、情けねえ話でさあ…… “ごろつき風情に屈してたまるか” って、突っ張った挙げ句がこの様な…… 笑い話にもなりやしない。へへへっ……」

「俺の…… 所為か？」

屋台の破壊に加え、店主への暴行が行われたのが昨日の今日である。

ここまで大胆な狼藉をいきなり働くような輩ならば、店主は当の昔に酷い目に合わされていたことだろう。それが急に行われたとなれば、何かしらきっかけがあつての事に違いない。

ヴァルトはその“きっかけ”が、昨日自分が起こした事件である可能性が高いと考えたのだ。

「……別にアンタの所為じゃないさ。……そろそろ、潮時だっただけなんだよ。奴等に突っ張り続けて此处で売するのも…… 限界だったって事さ」

「そうか……分かった」

あくまでもヴァルトの所為では無い。と笑って言い放つ店主の横顔を見て、ヴァルトはそれ以上返す言葉が見当たらなかった。奥歯を噛み、夫婦から見えない位置で拳を握り自身の爪を皮膚へと食い込ませる。

「まあここで嫁さんに会えば、後は何とか帰れるだろう？ ……俺は少し野暮用が出来たから、ここらで行かせてもらうぜ」

「“野暮用”って、ノスフェラトゥ……まさかお前さん……」

ヴァルトから漂う雰囲気は僅かに変わったのを悟ったのか、店主が顔を上げて驚いた様にヴァルトを見上げる。その視線と言葉の意図に気付いたヴァルトは、小さく肩を竦めて返事を返した。

「勘違いするなよ。俺は昨日アイツ等に言ったんだ、あんたも聞いていただろ？ “暴力を飯の種にしたけりや俺に断ってやれ”ってな。こっから先は俺の得意分野さ」

「……だけでも」

口端を上げて皮肉めいた笑いを向けるヴァルトに対し、店主はさらに言葉を続けようと慌てて口を開く。だがそれより早く、ヴァルトは懷から取り出したモノを指で弾いて店主へと投げ渡した。

「……俺がすっかり渡し忘れる前に、取っといてくれ」

「こ……こりゃあ!？」

慌てて受け取るうとして地面に落としてしまったそれを拾った後、落ち着いて手の中にあるモノを見た店主が驚きで素っ頓狂な声を出す。主人の変貌に傍で支えていた女性も店主の手を覗き込み、そこに輝く一枚の貨幣を見て小さな悲鳴を上げた。

「きつ、金貨じゃないか……! ……あんた、この人に一体何をしたんだい？」

「オヤジさんに、昨日の串焼きの代金を払い忘れていたんでな。こいつはその代金だ……取っといってくれ」

「あれは、儂の奢りだと……それに金貨なんて大層なモンは貰えねえ！」

「借りを作つたまんまっつてのは、どうも俺の性に合わ無えんだよ。それとな……オヤジ、あんたの串焼きは本当に美味かった。またそれで俺が食いに来た時、焼ける様にしといってくれや」

「旦那……」

腫れた顔を歪ませ、目からはボロボロと涙を流して泣き咽ぶ店主の肩をヴァルトはそつと叩く。

人に感謝などされる行為からは何年も遠ざかっていた為、胸の奥にむず痒い気持ち走る。だがそれを悟られない様に、ヴァルトは悪戯っぽく笑った。

「俺は“ヴァルト”だ。親しい奴にはそう呼ばせてる。オヤジ……あんたとは肩書き抜きで、これからも楽しく付き合おうじゃないか」

そう言つてヴァルトは行き場の無い感情を誤魔化す為、肩からずれていた背負い袋の紐を戻しながら、泣き続ける店主とその妻に対して優しい言葉を掛けるのだった。

寄り添つて自分へと感謝の言葉を述べる二人の夫婦を眺めているうちに――不思議と先程までヴァルトが内に抱いていた不快な感情は消え失せていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7490y/>

我が慟哭八、拳ト成リテ

2011年12月16日06時04分発行